

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
「感性の豊かさを育てる」とは？

[実践研究] 私の保育ノートから
大学の中で育つ小さな子どもたち

[保育エッセイ] 子どもたちの「^{いま}現在」を考える
少子化のメリット

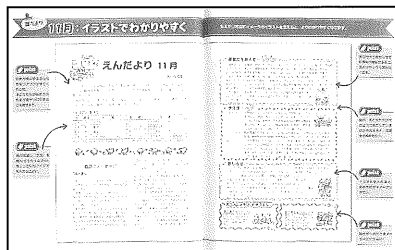
秋 2013

since 1901

指導・研修にお役立ち!

実際に使われた実例が充実!

① 全国の幼稚園・保育所の実例から厳選



本書の実例は保育者が限られた時間の中で実際に作成した内容なので、現場で役立つアイデアが満載。すべての保育現場で活用可能です。



「はる・なつ編」もあわせてどうぞ!



10922

保育が伝わる 心がつながる

おたより実例集 あき・ふゆ編

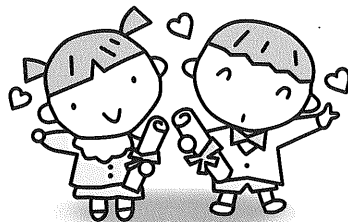
今井和子/編著 定価2,205円(税込) 26×21cm 10923

128ページ+カラー図絵4ページ CD-ROM付き

※CD-ROM仕様

対応OS: Windows2000以降、Mac OS10.X

アプリケーションソフト: Microsoft Office Word97以降



② 多種類のおたよりを紹介

園だより

クラスだより

子育て支援

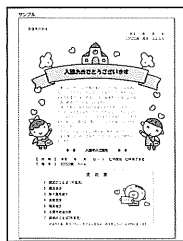
保健・食育

行事

その他

園だより～保健・食育～地域子育てなど、保育現場で使われる役割の違うおたよりを紹介しています。Pointを参考に、多様な視点で保育内容や発信内容を捉えることができます。

③ CD-ROM付きで便利



自園に合った行事のおたよりがすぐできるテンプレート入り。モノクロ&カラー(各2種類)から選べます。また、本書で紹介していないテンプレートもあります。



「そーれ！」

ぱら ぱら ぱら

「わーい！ ゆきだ！」

子どもの情景

【海外レポート】

イタリア保育“おもいっきり”参観記(4) 三大ラボラトリーオ 金澤妙子 ———— (51)

【研究】

『幼稚園』の原著者ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 2

企業家マイヤー家の人々

ディーター・レドナック ・翻訳:ベルガー有希子 ・解説:大戸美也子 ———— (57)

【報告】

「三歳未満児の保育を実践事例から考える～開かれた心を育む柔らかな生活の場を求めて～」

バオバブ保育園ちいさな家園長 遠山洋一先生の講演とバズセッション 菊地知子 ———— (63)

【アーカイブス】

幼児の教育110年の散策

「笑う」「笑い」「ユーモア」

— 第40巻第4号(1940年4月)、第46巻第9号(1947年11月)より ———— (66)

【子ども学のひろば】

学会 研修会情報・読者投稿・エピソード他 ———— (71)

プロローグ

混とんと整然と

浜口順子

最近普及しているヨーロッパ発の積み木は、一片一片が薄く軽く細長い長方形、全部同形の白木の板で、普段はバラバラに無造作に専用の木箱に収められている。「壊すのがもったいない」ような壮大な作品が出来ても、やはり最後は一気に崩す。崩れる時のカラカラという乾いた美しい音を聞き、最後は大きな専用箱にザッとしまっていて終わる。

一方、遊び終わった後、いかにもきれいに箱にしまうように出来ている積み木もある。上の積み木に比べて、各片の重さや形状が確かで個性があり、専用箱のほうからは「整然と並べればぴったり納まりますよ」

というメッセージが感じられる。

ある幼稚園での話。子どもが後片づけをしないので、一度遊んだままの状態で帰らせ、そのままにしておいた。翌朝子どもたちはびっくりして、片づけをするようになったが、「効き目」は一時的だったそうだ。

一世紀ほど前、フレーベル恩物を専用箱からかごの中へとバラバラにぶちまけたのは倉橋惣三だった。保育環境として「混とんと」「整然」とをどう織りなすのか。その間の線引きは大人の価値観の表現でもある。子どもの美意識や創造性が豊かに育つかどうかにも大いにかかわっていないか。

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

【写真】

子どもの情景 ①

【目次 プロローグ】

混とんと整然と 浜口順子 ②

【特集】

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 11

「感性の豊かさを育てる」とは？

インタビュー 和久洋三氏（聞き手）浜口順子 ④

感性の豊かさとは - 子どもたちとのふれ合いの中で - 横谷厚子 ⑬

「感性」の意味 平田流解釈 平田智久 ⑭

みんな踊って、みんないい 中野優子 ⑳

【シリーズ】

子どもが育つ場所を訪ねて

遊び・アート・歌 豊かな生活が紡がれている 岩屋保育園 宮里暁美 ㉔

【実践研究】

私の保育ノートから

大学の中で育つ小さな子どもたち 濃崎由紀子 ⑳

【保育エッセイ】

子どもたちの「^{いま}現在」を考える ③

少子化のメリット 本田和子 ㉔

【からだ考】

食べる・つながる・育つ

「おいしい、うれしい、たのしい」でつながる子どもたち 西野博之 ㉔

【子ども学探訪】

編輯顧問 倉橋惣三 とキンダーブック ⑦

「犬」を主題にした観察絵本 浜口順子 ㉔

特集

問

い直そう、保育の中のアたりまえのこと11

「感性の豊かさを育てる」とは？



インタビュー

わくようぞう
和久洋三氏

童具館館長、童具開発研究所 WAKU 所長、「和久洋三のわくわく創造アトリエ」主宰。『遊びの創造共育法（全7巻）』『子どもの目が輝くとき』（ともに玉川大学出版部）ほか著書多数。

「上手じゃないから絵かくのきらい」という子どもがいます。絵や歌などの表現を「うまい」「下手」で評価する、親や保育者たちの視線にさらされているからでしょう。保育内容「表現」領域では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことが目的とされています。「豊かな感性を育てる」とはどういうことなのか、長年子どもの創造活動を見守り育ててこられた和久先生にインタビューしました。「考える」コーナーには、幼稚園から榎谷先生、保育者養成の現場から平田先生、自らダンサーでも研究者でもある中野さんが、ご寄稿くださいました。

聞き手 浜口順子（本誌編集委員）

和久先生の幼少のころ

浜口 子どものころ先生はやっぱり感性豊かな少年だったのでしょうか。

和久 かもしれないな。遊ぶのが好きで、好奇心旺盛だね。小学校一年の時から、絵を習いに行っていたんですよ。友達が行っていると聞いて見に行ったら、面白そうなので、僕もやりたくなった。それでおふくろが多分通わせてくれたと思うんです。でもね、クリエイトするのは何も絵とか物づくりだけじゃなくて、楽しく遊びをつくり出す、それもクリエイトだからね。これは人後に落ちなかったですね。小学校、中学校、高校、ずっとなんだけど、勉強はできないけど遊ぶ時は必ずリーダーになっていった。今でも、次から次に発想はわきます。創造力っていうのは衰えないね。

浜口 それはやっぱり、見守ってくれる大人が先生のそばにいらしたっていうことでしょうか。

和久 というかね、見守られなかったからじゃない

かな。

浜口 へえー、そうですか。

和久 うん、好き勝手にさせてくれていた。僕は兄弟四人なんだけど、兄貴たち二人はものすごく勉強できたんですよ。僕と下の兄貴の間に一人、姉がいたんだけどね、彼女が小学校一年の時に、僕が三歳の時だけどね、亡くなっちゃったの。それで親父は明治の男だったからすごく厳しい人だったんだけど、姉が亡くなったことよってね、多分、命より大事なものは無いっていうのかなあ、そんな感覚が親父の中に出てきて、うるさく言わなくなったんじゃないかな。だから、僕だけはものすごく自由に育ったんですよ。怖かったことは怖かったけどね。

浜口 お兄さんともよく一緒に遊んだのですか？

和久 下の兄貴は、東大行ったんだけどね、僕が幼稚園から小学校の低学年の時まで、よく本を読んできました。

浜口 いくつ年が離れていらっしやるんですか？

和久 六つ。間が三、三、三だったのよ。それで姉

が亡くなったから六つ。兄貴はサトウハチローの詩が好きでね。童謡を自分でも書いて。本当に、今になってみるとすごく兄貴の影響を受けているんだなっていうのを感じます。おふくろはもう、ただただ優しいおふくろだったから、叱られたっていう記憶がないくらい。

浜口 東京の町中でお育ちになって、自由に遊んで、けがも多かつたんじゃありませんか？

和久 けがは多かったですね。でもやっぱりね、あの「遊び込んだ」っていうのが今全部生きているんだよね。いろんなことに好奇心を持って、そして友達が好きだったから、友達を巻き込んだり何かやっていたからね。今、若い人を見るとね、遊び足りねえなって、やっぱり思うね。もっと遊べよお前たちってね。

浜口 先生ご自身は幼稚園に行かれたのですか？

和久 幼稚園にね、泣き虫で行けなかったんですよ。おふくろが、入園して一週間であきらめたって言うてましたね。保育室に入って、最初は親たちが窓か

ら見ていますよ。それで一人二人といなくなるんです。そうすると僕は「おふくろがいなくなつたぞ、わあああーっ」と出ていっちゃう。(笑)

保育園で働いたこと

浜口 保育園で一時、働いていらしたんですね。

和久 うん。働いていたっていうほどでもないんだけどね。大学出てね、フレールベル館で二年間働いたんですよ。それでどうしても子どもの現場に入りたいたい始めたの。

浜口 東京都内の保育園で？

和久 ううん、浦和(埼玉県)の保育園。実はね、僕は大学院の時に美術大学の予備校で教えていてね。その教え子のお父さんが保育園をつくるっていうので、それで僕に白羽の矢が立ったんだけど、僕は、園長をやったら夢中になって、デザイナーの道を断つことになるからそれはできないって言うて。でも、保父さんにはなりたいたいと思っていたから、ならせてくださいって。それで金のために予備校に週二日指



▲和久洋三氏

導に行つて、保育園にも二日行つて、残つた時間で
フレーベル館の仕事させてもらつて。二年ばかり
そういう生活をしていました。
浜口 保育園では、たくさん子どもと遊びまわつた
んですか？

和久 僕は造形活動を指導するという役割でね。た
だもう今考えると申し訳ないというかね、恥ずかし
いようなことしかしてなかつたんだけど。子どもに
こつちが学ばせてもらうにしても、学ぶだけの下地
もまだないんです。そこで、一年間、子どもが何で
遊んでいるかというデータをとつてみたんですよ。
そしたらね、一番遊んだのがね、外ではボール、部
屋の中では積み木だったんです。僕はもつといろん

な形のいろんな面白いものを
作ろうと思つて、勇んでいた
わけですよ。そしたら、丸と
三角と四角でさ、子どもは遊
んじやうの。まずいな、これ
じゃデザイナーいらさないじゃ

ないかつてね。

でも、それがよかつたですね。その丸と三角と四
角で遊ぶ意味を問いつつて、その後二十年ぐらいた
つてね、フレーベルとの出会いつつていうか、それ
によつて理解していくんだけれども。あの時に子ども
とかかわつて、そういうデータをとらなかつたら、
自分勝手なことばかりやつていたでしょうね。

もう一つ、ミーちゃんという女の子（四歳）が
いてね。登園すると「ちえんちえん」つて飛びついで
くるの。かわいい子でね。それが、ある日いなくて
ね、どうしたんだろうなと思つたら、園庭の片隅で
ポツンと立つてるの。そばに行つて、「ミーちゃん、
おはよう。どうしたんだ？」と言つたらね、ふつと
目線を下げるの。目線を追つてみたら、新品の真っ
赤な運動靴履いているんですよ。「おっ！ ミーちゃん、
新品の靴じゃないか、いいなあ」つて言つたら、
カーディガンをこうヒラヒラさせるの。おそろいの
赤いカーディガン。「おっ！ おそろいじゃないか、
似合うぞ、かわいいぞ」つて言つたらね、初めてに

こつと笑つてね、「これ昨日お母ちゃんに買つてもらつたの。靴は、お父ちゃんに買つてもらつたんだよ」と、ぼつつと言うんですよ。お父さんが何か月前に交通事故で亡くなつてね、多分その亡くなる直前ぐらいに、お父さんがミーちゃんのために買つてくれた靴だったんだね。それがちょうど履けるようになって、お母さんがミーちゃんにその靴を履かせるのにおそろいのカーディガンを買つて着せてきた。

その日から彼女が変わつてね、運動靴をきちつとそろえて部屋に入るようになったの。それまではね、ポーンと投げ入れるような子だったのがね。それ見てね、物つてこういうものなんだつていうのに気が付いたんですよ。それは、もういないお父さんが最後に買つてくれた靴、そういう思いが込もつたものなんだよね、ミーちゃんには。物を感じるんじゃないかね、人の心を感じるんですよ、物を通して。きつと、お母さんの思い、お父さんの思いを、靴を通して感じていたんだと思うんです。

これからおもちゃを作る時、ただ形を追っていく

だけじゃだめだな、つて思つたの。子どもが何を感
じ、何を考え、お母さんたちに何をメッセージする
か、保育者に何をメッセージすればいいか、という
ことを、きちつとこつちが持つていないと、非常に
身勝手な独りよがりのものを作つて与えることにな
るなと思つたんです。それからね、勉強し始めまし
た。心理学の本とか、フレーベルとか、いろんな教
育学の本を読むようになったの。それはやつぱり、
ミーちゃんに出会つたことが大きいんですよ。

感覚と感性

浜口 表現をする上で、いろいろなものに触れる機
会はやはり大切なのでしょうか。

和久 一番核にあるのは、豊かな生活体験ですよ。自然とふれ合うとか、お母さんとふれ合う、友達とふれ合う、そういう人間として心が通じ合うという世界、これがベースにあつて、子どもにとつてのおもちゃはそれを表現していくツールなんです。そして、その表現をする時に、実はおもちゃにも物事

の中にも秩序が見え隠れするんですが、秩序を発見することによって創造的な世界が広がっていくんだということを知っていく。

浜口 その秩序を悟っていくところが、感覚ではなくて、感性でしょうか。

和久 そこが一番難しいところだね。秩序を理解するっていうのは知性ですよ。だけど、知性と呼び起こすのは感性なんです。例えば、感動するとかさ、素晴らしい！ っていう驚きとかね。そういうものはやっぱり感性の世界ですよ。それがあるからこそ知性が働きますんであって、ただ知性だけを育てようとして感性をネグレクトしたら、多分人間って育たないと思いますね。

浜口 感覚と感性の関係はどういうものですか？

和久 感性と感覚の違いは、例えば、ものを食べるでしょ。甘い、辛い、苦い、しょっぱい、これ感覚でとらえるものですよ。

浜口 動物的なものなんですかね。

和久 そう、そのまま即物的なね。ところがそれ

を、おいしいとか、まずいとかっていうのが感性ですよ。つまりそこに調和を感じ取るか、感じ取らないか、それが感性だと僕は解釈してるの。

浜口 先生の考案された玩具は、遊んでいると、ピタッと合うとか、すつきりするとか、そういう気持ちよさを感じます。これは調和でしょうか。

和久 感覚と感性もね、切っても切れない関係にあると思うんですよ。ピタッといったというのは感覚的なものだよ。でも、気持ちいい！ っていう時はもう感性ですよ。きれいだとか、心地いいとかね、そういうのはみんな感性ですよ。

僕は、あらゆる物事のキーワードは関係性だと思ってるんです。すべて人間が感じたり考えたりするのは、関係性を見つけ出す、関係性を読み取る、関係性をつくり出す、ということだと思ってるんです。その関係性の究極は何かという、一致。ピタッと合う。



だから子どもって一〜二歳から「同じ」ということをすごく喜ぶんです。ピタッと合うのが大好きなの。一歳になるかならないかのころから、型合わせをピタピタッとやったりね、ビーズをずっとピンに挿していったりするんですよ。二歳になると「おんなじ、おんなじ」と言って喜ぶ。一致の快感っていうのが、どうも人間の究極の願いなんだね。簡単に言うくと、生命って、雄と雌とが一致しなきゃ生まれませんですよ。だからね、例えばこうやって二人で話している、「僕、今こういうことやろうと思ってるんだけど」「あら、私もそれ興味あったの」「よし、一緒にやろう！」と一致するから広がるんですよ。実は僕が若いころは、二つ三つのものが一致するということは可能性が少なくなるって感じていたの。だからいろんな意見があったほうがいいんだ、ってね。もちろんいろんな意見があったほうがいいんだけどね。だけど、何かが生まれる時は一致しないと生まれませんよ。いや、私はそれ興味ない」「僕も興味ない」じゃあ何も生まれないわけじゃない

い。そこで、「あつ、それ面白いからやろうよ」って言った時に、一致した時に、何かが膨らんでいく。生命もそうでしょ。創造活動もそうなんですよね。関係性を探し出していく、つくり出していく作業なんですよ、すべて人間のしていることは。

大人になっても感性を育てられるか

浜口 大人になっても感性は育つのでしょうか。

和久 感性を育てるにはどうしたらいいかっていうとね、いいものに出合うしかないんです。簡単に言うとな、おいしいものを食べなきゃおいしいものってわからないですよ。おいしいものがわかるとまづいものがわかるようになるんです。だから、感性を豊かにするには、いいものに出合うしかない。

浜口 いろんな所に出かけて行って……。

和久 そう、いろんないいものに出合う。そうすると、つまらないものがわかってくるんですね。それがどんどん豊かになってくるとね、藤島武二の絵じゃないけど、例えばパリの汚れ切った壁と古いバラ

ツクみたいな家だつて、描くと絵になっちゃうわけですよ。あれをなぜ彼は絵にするか。きれいだから、美しいからですよ。つまり、いろんなところに美しさを見つけ出せるようになるんです、感性が豊かになるということ。

浜口 大人はよく本物みたいに描けている絵に「うまい」と感心します。その眼で見ると、子どもの作るものは、つまらなく見えてしまう。

和久 僕もね、実は、芸大を出ているからちゃんと作品の本質を見抜けると思われていたようだけど、本当に本質が見られるようになったのは、五十五歳過ぎからですよ。それまではね、学んできているから、

いろんな価値観が頭に入っているんです。その与えられた価値観でものを見ちゃうんです。自分の素直な気持ちで無心にもものを見るんじゃないかと、例えば、ピカソの絵はこういう時代背景があつてこういう歴史があつて、それでこういうものが生まれてきたんだとかね。そんなことも価値基準になっちゃう。

浜口 知識が邪魔をするんですか。

和久 頭でいろんなことを考えちゃうんですよ。それを捨てさせてくれたのは子どもの絵ですね。子どもはね、そんなこと何もないんだから。そのまんま心にあるものが表出されるわけですから。それでピカソの絵と比べて遜色ないんだからね。ピカソが「や」と子どものように絵が描けるようになった」と言つたのは九十歳を過ぎてからです。

三歳、四歳の子が、すごいのを教えないのに描くわけですよ。僕は何も指導しませんから。僕の教育法は指導しない教育法だからね。

指導しない指導

和久 なぜ指導しないかというとな、集中力を途切れさせたくないんです。子どもは何かを本気でやる時には、絶対自分で答え探しをしているんですよ。その答え探しをしている時に、大人というのは安易に「こうしたら、ああしたら」と自分勝手な答えを与えちゃう。でも、それは自分で見つけ出した答えじゃないの。だから、子どもに見つけさせてやりた

い。子どもはね、試行錯誤しますよ、子どもが絵を描いているのを見て、「ああっ、素晴らしい絵だったのにあんなになっちゃった、ううう」なんてがっかりしていると、またちゃんと感動する絵に戻っていったりね。「おおっ、やっぱりなー」。納得させてくれます。

浜口 「褒めの子育て」と称して、「すごい」とか声掛けしよう、なんていう風潮もあります。

和久 それはいいんですよ。ただあまり具体的に褒めちゃいけないの。例えばね、目を緑色に描いた。「おお、緑色の目、面白いね」と言うでしょ、そうすると次から必ず緑色の目になる。(笑)

浜口 そうか。あまり具体的なのはいけない。

和久 そう。「こういうの先生好き。いいねー大好き」って、これでいいんです。抽象的に褒めたほうがいいんですよ。

浜口 「本物みたい」とかはよくないですか。

和久 本物みたいというのは、似ているっていうだけのことだから。似せる必要なんか何にもない。子

どもたちが絵を描くたびに、僕がかなわないと思う絵に必ず出合います。ああ、いいなー、こんなふうを描きたいなーと思う作品に。アトリエ注に来た初めての子どもにもですよ。つまり、子どもはもう潜在的に調和や美を読み取る力を持っているんです。

大人がまず変わらなきゃ、子どもがかわいそう。僕も若い時はね、何もわからなかったんです。でもこうやってアトリエ持つて、日常的に子どもとつき合ってみると、ぶわーってやっと思えてきた。五十歳ぐらいになってからだね、見えてきたのは。今七十歳だからね。つまり大人ってね、子どもをバカにしているんだよ。この程度のものだって、思い込んでいるのね。それを、何とかしなきゃいけないのが、これからの僕のやるべきこと、使命なの。

(二〇一三年四月二十二日)

注

和久先生が運営する童具館の

「わくわく創造アトリエ」のこと。



私はこう 考える

「感性の豊かさを育てる」とは？

感性の豊かさとは

— 子どもたちとのふれ合いの中で —

槇谷厚子

(幼稚園園長)

感性の豊かさとは、という題を頂いて途方に暮れました。日ごろ子どもたちとの生活の中で、よく笑い、よく遊び、よくうれし涙を流し、時に世の中の出来事に嘆き、発奮しながらも、多少のことにはへこまない楽天的な私です。感性の豊かさについての文章を書かせていただくのはおこがましい気がしてなりません。でも子どもたちの日々の生活や、時折見せてくれる成長の姿からは、感性の豊かさにつながる思いを感じさせてもらえる時が多々あります。日々の生活の中で、心を弾ませたつぷりとさまざまな感情をかみしめていくことの大切さを痛感しています。これまでの子どもたちとの生活の中には、忘れられないエピソードがたくさんあります。その一つひ

とつが、その後の私の生活にヒントを与えてくれたり、パワーを与えてくれたりしています。それは、子どもたちの感性の豊かさによるものだと、改めて強く感じさせられます。

三歳児を担当していた二十年近く前のこと。すべての水道の水を全開にしては喜んでいるA君がいました。その都度声を掛けてはいたのですが、暑さも手伝って、水道の傍らにはいつもA君が！そして、ついに牛乳パックに水を入れて、ままごとコーナーまで運び、コップにかいがいしく注いで、水浸しにしてしまったことがあります。早生まれで、おっとりしているのですが、いざとなるとまっしぐらな

槇谷厚子（まきたにあつこ）

浦和のぞみ幼稚園園長。子ども時代を子どもらしく過ごせることを願って、たっぷりとした時間と空間を

A君です。まったく聞く耳を持たないA君に困ってしまい、「どうして、お水を持って行っちゃうの？」と苦し紛れに言うのと、しばらく考えたA君。「えーっ？ やってみようかなーって思ってた……」と、たどたどしい言葉を駆使してそう言うのです。何とかしてやめさせようと必死になっていた私は、拍子抜けしてしまったような思いもしましたが、何だか妙に腑に落ちた感覚を覚えました。それから、A君のその言葉を思い出して、まずその子の思いに心を寄せてみようと思えるようになりました。それからはいたずらと思えるようなことにも少しはゆとりを持つて受けとめられるようになりました。

ところが、その数年後、とにかくヤンチャなB君との出会いがありました。B君も年少組です。自分の思い通りにいかないと物に当たり、友達とのトラブルも次々起こります。私もまたまたゆとりどころではなく、うまくいかない……と焦る気持ちもいっぱいでした。毎日試行錯誤をしながらかかわっていました。

一緒に楽しめることも多くなって、やっと素直な思いも伝えてくれるようになっていたころ、事件は起こりました。園庭の池の金魚をスコップですくい、次々と外に出しているではありませんか！ 急いで金魚を池に戻し、腰を下ろし、B君の手をぎゅっと握り、話していました。でも一方では、伝わっていないのか確信が持てずに迷っている私がいきました。

そこへ救世主のように現れたのは、年長組のC君。その一部始終を見ていたようです。そして、ひと言、「でもさ、こいつお兄さんになったよね……」と言うのです。「どうして？」と言葉を失っている私にC君は続けます。「だってさ、先生の話、ちゃんと聞いてるよ」……そういえばそうです。少し前だったら私の手を振りほどいて、その場から立ち去りたくなっていたであろうB君が、一応私の話には耳を傾けているのです。はっとしました。お兄さんに思いがけず褒められたB君もホッとしたような顔をしています。「ほんとだね。B君お兄さんになった」と言うのと、大きくうなずいていたB君でした。小さな成長

をしっかり見ていくことの大切さを年長組のC君に
気付かされた私です。

そして、D君とのエピソードも私にとって忘れら
れないものです。D君は、今年中学生になりました。
今でもよく園に遊びに来てくれておしゃべりをし、
冗談を言って笑わせたり、自作の文章を朗読してく
れて私たちを号泣させたり（実に感動的なのです！）
しています。発達がゆっくりだったD君は、在園し
ていたころは言葉もなかなか出ませんでした。きつ
ともどかしい思いもあったと思います。でも当時、
園で飼っていたウサギが大好きで、暖かい日には日
向ぼつこをさせてくれようと大きなケージごと引つ
張ってテラスに出してくれたり、掃除が大好きで自
分の背よりも大きな箒（ほうき）を見事に使いこなして手伝っ
てくれたりと、優しさや好奇心にあふれていました。
そんなD君が小学校の特別支援学級に進み、一年
が過ぎようとしていたある日のことです。小学校と
の連絡会があり、学校へ出向き、D君のクラスをの

ぞきました。ところが突然いなくなってしまった上
級生を捜索（―）に行かれる先生方から、私は、D君
を含む数人の子どもたちと教室で留守番をするよう
仰せつかりました。急なことで少し戸惑いましたが、
D君やほかの子どもたちに自己紹介をしたり声を掛
けたりしていました。すると、D君は私のことをチ
ラツと見てにつっこり笑ったかと思うと、その前の授
業で書かれたと思われる黒板の文字を大胆にも消し
始めました。そして、すっかり文字が消された黒板
に、何とすらすらとチョークで「あつこせんせい、
あつこせんせい、あつこせんせい」と大きく何回も
書いたではありませんか。私のことを、あつこせん
せい」と認識してくれていたとは思いますが、それ
までD君に口に出して呼ばれたこともなく、まして
や覚えたての文字で書いてくれるなんて……びっく
りすると同時に、D君の行動とあふれる思いに心が
震え、涙があふれてきました。でもまたすぐに消し
てしまったD君！ ちょっぴり得意げに、につっこり
笑っていました。夢のような一瞬の出来事でした。

そして、昨年のも三月の誕生会のこと。年少組の三月生まれのE君は、遊び心もあり、楽しいのですが、とてもシャイです。三月生まれの年少さんですから、在園児の中では一番小さいことになりました。誕生会では、その月生まれの人が冠をかぶり、ステージに上がり、自分の名前を言ったりインタビュに答えたりします。年長組、年中組と進み、いよいよE君の番になりました。名前は思いのほかすんなりと言えましたが、好きな食べ物は何ですか？ の質問には沈黙……。でも、嫌がる様子はまったくありません。少しして、客席の後方にいらしたお母さんに伺うと、「ウインナーかな？」と言ってくれました。しかし、はつきりと首を振るE君。ステージの下で聞いているみんなも、「言いたい！」というオーラをたつぷりと出しているE君の気持ちをちゃんと受けとめてくれることが伝わってきます。隣で緊張しながらもインタビュを終えたFちゃんは、「迷っちゃうんなら、一番じゃなくても、好きなのだったらいよいよ！」なんて小声でアドバイス。さすが年中

さんです。……どれほどの時間がたったでしょう。でも不思議なことに、せかすような空気はまったくなく、みんな根気強く待つていてくれました。そしてついに、「ハンバークー」とE君が答えたのです。満足そうな笑顔です。とびきり大きな拍手が、E君に向けられました。E君の、そしてみんなの成長も感じられた、うれしいほのほとした三月の誕生会となりました。

これまで、たくさん子どもたちと出会い、たくさんのお話を教えてもらってきました。日々のささやかな出来事の積み重ねが、子どもたちの感性を磨いているとつくづく感じさせられ、子どもたちの持つ感性の豊かさに驚かされます。そんな日々を子どもたちと共に過ごせることに感謝しつつ、これから一人ひとりの成長を願い、ていねいにかかわっていきたいと思います。それが自分自身の感性の豊かさにつながっていくことになるのかもしれない。

私はこう
考える

「感性の
豊かさを
育てる」
とは？

「感性」の意味 平田流解釈

平田智久

(大学教員)

感じて・考えて・行動する……中に「感性」がある

人は、感覚器官を駆使して身近なさまざまな情報や刺激を取り込みます。その情報や刺激を受け前頭葉で考えます。考えたことはいろいろな手段で行動します。その行動の結果を自ら見て触れて(感じて)満足したり、もつと〇〇したいと考えて、また行動を繰り返します。これは子どもに限ったことではなく、大人にもいえることです。

そうした行動の繰り返しを平田流に「内的循環」と名付けました(心理学的には内的ではない、と指摘も受けましたが)。感じ・考え・行動する……とい

う「内的循環」の繰り返しは日常的に行われていきます。カレーを調理している時も、炒めているニンジンの一つが大きければ、取り出して適当なサイズにして鍋に戻します。朝の洋服選びも、どうも上着とシャツが合わないと感じると、どちらかを変えてみたくなります。そうした行動が「内的循環」です。

感覚器官は人によって敏感な人も鈍感な人もいます。不具合な人もいます。でも感覚器官が単独で反応するのではなく、さまざまな感覚器官が受けとめた情報は脳幹に送られます。脳幹はご存じのように生命維持の重要な部位で、心臓のペースメーカーであり、情動(喜怒哀楽)もここから発信しているそ

うです。そうした情報は前頭葉で総合的に判断しています。その前頭葉の動きこそ「感性」のスタートのようです。

「内的循環」の『考える』部分は前頭葉が行います。『考える』という言葉には『思う』という意味も含んでいます。

子どもの様子で説明すると、登園してきたらすでに友達に「ドロドロジュース」（カップの中に土と水を入れ、かき混ぜてドロっとした液体）を作って遊んでいた。↓それを見て「ほくも作りたい」と思う。
↓部屋にカバンを置き、砂場へ。↓早速「ドロドロジュース」に挑戦。↓できたジュースは「シャブシヤブ」。↓「もつと土を入れればいいんだ」と考えた。
↓何度か繰り返し、思った通りの「ドロドロジュース」が完成。そうした様子でもわかる通り、思うことと考えることは重なり合っています。その意味で両方を合わせて「イメージ」と呼んでいます。感じ・イメージし・行動する……となります。

行動するとは、前頭葉の指令を受けて体中の筋肉

がさまざまに絡み合っただけでイメージの実現に向けて動くことです。

無機質にロボットのようには動くものではありません。「ドロドロジュース」の事例で説明すると、イメージ通りでないジュースを見た時、「わあ違う」と驚きの声や表情をしたことが想像できます。手や目ばかりでなくさまざまに体中をコントロールして何度も作り直します。思い通りにできた時は「やったー」と気持ちを表したに違いありません。つまり『行動する』とはイメージに呼応して行動することであり、言葉も身振りも音も、もちろんもの（造形）も駆使した総合的な行動です。その意味からも「総合的」なんです。また、子どもの考えや思い、心の様子が感じられる行動ですから、「表現」ともいえます。やつと本論です。前頭葉からスタートして行動に至るまでの流れを「感性」と言いたいのです。

「感性」の範囲についてお話しましたが、続いて「豊かさ」について説明します。

ここでいう「豊かさ」とは、「イメージ」と「行動」の豊かさにはかなりません。さまざまに、いろいろと考えたり思ったりできることが「豊かさ」です。いろいろな方法で行動できることも「豊かさ」です。保育の中で好奇心を発揮している子どもも「感性の豊かさ」、作りながらイメージがどんどん変わっていく子どもも、オーバーアクションで完成を喜ぶ子どもも、たくさんお話を聞かせてくれる子どもも、みんな「感性の豊かさ」です。イメージ（考えたり思ったりできること）が幾つも浮かんでくる子、さまざまな行動で自分のイメージを伝えてくれる子どもがすてきです。そんなすてきな子どもに育つてくれることを願った保育がしたいです。

でも世の中には、「ああしろ、こうしろ」と、指示の多い保育もあります。「あのね……」という子どもの声に耳を傾けない保育者もいます。解剖学の養老孟司氏の「忘れないで欲しいのは、脳みそは総合なんだってことなんですよ。感覚を受けて、脳みそが計算して、その結果が体の動きとして出て、その

結果がもう一度感覚として入力されて……というふうに、脳は回っているんですよ。——中略——それが根本的な意味での『学習』なんです。』（『BEPAT』七月号 小学館 二〇〇八年 No.325）という文章を思い出します。見た目の美しさや、答えが合っている……という評価だけで人を決めつけてしまう社会はおかしいのです。

カクテルパーティー効果（選択注意）

この言葉は心理学で使われています。電車の中でもイヤホンの音漏れの音に反応して耳を傾けてしまう体験が、カクテルパーティー効果です。また、子どもたちの中でも虫が好きな子どもは、虫見つけが得意です。これはカラーエフェクト効果というそうです。どちらも、興味関心の高いもの・ことへ、脳を経由しないで直接感覚器官に働きかけてしまうことだそうです。そうした特殊な行為も人間にはあります。子どもにも反射的に行動することが多くあります。「落ち着かないのね」と子どもにもレットテルを

張る前に、人間らしさに感動することが重要です。

そうした特殊な状況もあることを理解した上で重要なことは、「イメージ」の源は「興味関心」であるということなのです。

子どもたちの「興味関心」に寄り添った保育であれば、感性を働かせた行動が期待できます。さらに強く「興味関心」を持った子どもがいれば、いっそう充実した保育が展開できるはずです。つまり保育者の子どもを見つめ、感じ取れる「感性」がキーポイントになります。

「みんな違ってみんないい」

「感性」について考える時、同じ状況にいても子どもたちはさまざまな反応をしてくれることを思い出します。また、昨日と同じなのに行動が違っていていることにも気付きます。そうした子どもたちの様子から、人の感性は常に変化しているといえます。つまり年齢、性別、興味関心、経験の有無、心持ち、体調……によって感じ取り方、刺激に対する反応のし

方が違います。大人にもいえますね。体調がいい時と悪い時とは違います。そうした日々変化する「感性」を受けとめる仕事は保育ともいえます。つまり「表現」という見方、考え方にポイントがあります。「表現」は、音楽でも造形でも、うまい下手……という結果主義ではないのです。「表」は意思を、「現」は内的な変化を示しています。その二つが重なって「表現」なのです。「感性」を感じ取るには、言葉にまらない子どもの思いや工夫しているところを見つめる、気付ける大人の存在が必要です。

ところが、金太郎あめのように同じ結果を求める保育が横行していることも現実です。「みんな違ってみんないい」のに……。

子どもたちはいつも身近なさまざまなことにアンテナを張り巡らし行動しています。まねして喜んで得意になったりを繰り返して育っています。そうした子どもたちの行動に心を寄せていける保育者でありたい、大人でありたいと思います。

私はこう 考える

「感性の
豊かさを
育てる」
とは？

みんな踊って、みんないい

中野優子
(ダンサー・研究者)

皆さん初めまして。

私は普段ダンサーをしながら、ダンス（特にコンテンポラリーダンス）の創作プロセスについて研究しています。もう少し具体的に書かせてもらうと、ダンス作品がどのように生み出されているのか、そしてどのようにその生み出されたダンス作品は踊られているのかということのプロのダンサーの方々にインタビューをさせてもらったり、実験を行ったりしながら実証的に研究しています。と同時に、自分でもダンス作品を創作して舞台上で踊らせてもらったりもしています。

そこでいつも考えたり感じたりすること、それは「踊るとはどういうこと？」ということ。さて、どういうことでしょうか。まだこの問いに対する明確な答えはまったく出ていません。踊っている限り、一生出ないかもしれませんが、うっすらと感じることはあるので、今回はそれを何とか皆さんと一緒に言葉にすることで、「感性の豊かさとは」を考えることに代えたいと思います。

では、「踊ること、踊っていること」を考えるために、反対の「踊っていないこと」を考えたいと思います。

「踊っていない」とはどういうことなのでしょう
か。そもそも「踊っていない」ことであるのでし
ょうか。

例えば、日常の中でよく遭遇すること……

立つことができるようになったばかりの小さい人
が一步を踏み出すその足音とリズム

人込みで全然知らない人同士があうんの呼吸でふ
つとよけ合う時

おしゃべりに夢中な指先や揺れる髪

電車でうとうととなる時の上体のリズム

考え事をしている人の集中している目線

ぼーっとしている時の開いた体

悔しい涙

怒りで体中がびりびりと震え、内臓がぎゅーつと

体の真ん中に寄せ集められる感覚

階段を駆け上がる軽い足と肩での呼吸……

これってすべてが美しいダンスだと思いませんか。
動いていることはもちろん、止まっている中にも、
その人の人生のドラマがにじみ出る無限の「動き」
を感じて、私はいつも美しいな、すてきだなと思っ
ます。つまりこの瞬間瞬間にも世界は踊っているよ
うに見えるのです。「踊っていないこと」も含めてす
べて「踊っている」ように見えます。

さて今、この文章を読んでくださっているあなた
の目、まつげ、口、ほお、手は、背中は、おなかは、
足は、皮膚の感覚は、呼吸は、心臓の鼓動はどうか
なっていますか？ あなたからつながっている世界は
どうなっていますか？

うーん、この人は何を言ってるんだろうと難しい
表情で腕を組んでいますか？ くすつと笑っていま
すか？

その表情や姿勢、心の流れすべてがすてきな踊り
で、美しいリズムを奏でているはずですよ。

「踊る」とはおそらくそういうことだと思えます。つまり、自分で自分の今ここにある体を意識して、ああ今この瞬間にもこの体は踊っているんだなということを実感し味わうこと、そして周囲のみんなも踊っているんだ、リズムを奏でているんだというまなざしを向けてみることに、このことが「踊る」ということをまず形作っているのだと思います。

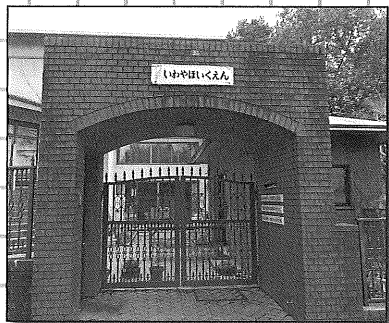
ふとした瞬間に、皆さんがすでに持っている体のリズムを感じてみませんか、そして皆さん一人ひとり今すでに踊っているダンスをもう一度感じてみませんか。そうすることで、少しでも世界がカラフルに動きだしてきませんか。

そう考えると子どもも大人もみんなみなすてきなダンサーになります。

みんな踊って、みんないい



これが、今の私がこの文章を通して皆さんと共に考えた「踊るとはどういうことか」に対する一つのまなざしです。この、「すでに皆さんが今この瞬間にも踊っている」ということを再確認することが「感性の豊かさとは」を考えるきっかけの一つとなりました、とてもうれしいです。



岩屋保育園

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします

第11回は京都市山科の岩屋保育園。岩屋神社の中にあり緑の柱に守られながら、子どもたちも保育者も生き生きと過ごす保育園を訪ねました。

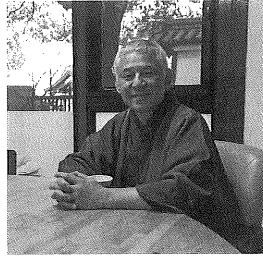


京都駅で地元の鍋島先生と合流。電車を乗り換えて山科駅に到着。静かな街並みの中に岩屋神社があった。階段の下から見上げれば、咲きそろうた桜が神社を彩っている。静けさの中に懐かしさと美しさが広がる。

子どもを連れなお母さんたちについて行くと、岩屋保育園にたどり着いた。門を入ると、和服姿の室田一樹園長先生が笑顔で出迎えてくださった。「父から譲り受けた着物がたくさんあり、できるだけ着ようと思っっているんですよ」と穏やかに話される言葉を聞きながら、今日という日への期待がぐんぐん高まっていった。

岩屋保育園は昭和二十五年に開園。「ここの保育をぜひ受けさせたくて」という熱い思いで入園希望者が集まってくるという。親子二代で岩屋保育園に通っているという人もいるとのことだった。

◆大きな丸い机を囲んでの語り合いから始まる



こちらへ、と案内された場所には大きな円卓があった。周りにはたくさんさんの書物。まるで研究室のようだ。「ここ、いいでしょう」と笑顔の室田先生。テーブルの中央には話

し合いに必要な文房具が入っているカップや録音機が置いてあり、フル活用されている場所だということとがわかる。室田先生は静かに語り始めた。保育園についての語りはそのまま室田先生自身についての語りへ、そして大切な二人の方との出会いについての語りへとつながっていった。

その一人が画家の藤田欽平先生。昭和五十五年ごろ、既存の保育研修会に物足りなさを感じていた時に藤田先生に出会い、「学びたい！ 学ぼう！」と決意。断られても粘り強く交渉し、ついに職員と絵を描く研修会を実現。その後長い間、藤田先生とのか

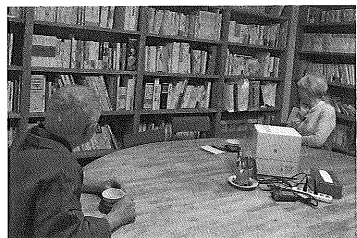
わりを重ね、多くの学びを得たという。

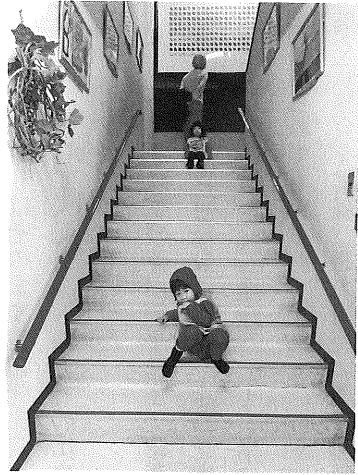
「芸術を愛している人に子どもものそばにいてほしい」「子どもものそばにいる大人がどのくらい豊かなものを見たり聞いたりしているかが大切」という言葉が心に残っている。

もう一人は鯨岡峻先生。六年間、先生の研究室に通い学びを深め、「エピソード自体に問いを立て、そこにコメントを書く」ということを丹念に重ねたという。その成果を『保育の場に子どもが自分を開くとき』（ミネルヴァ書房）にまとめられたのは最近のこと。保育者一人ひとりのまなざしや息づかいが感じられる内容で、それはこの大きな丸いテーブルを囲みながら生まれ、そして今も生まれ続けているのだろう。

◆アトが息づく空間が随所に

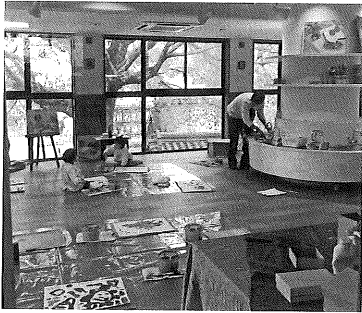
話は尽きないけれど子どもたちの場所をぜひ見



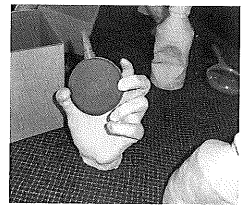


風景。階段の壁には子どもたちが描いた絵が美しく飾られ、踊り場には印象的な絵画が飾られている。階段の手すりは赤く彩られ、壁や階段の白の世界にアクセントをつけている。そこに座っている子ども達の服の色まで絶妙に絡み合い、環境全体がアートになっている感じがした。

園内にはアトリエという部屋があり、この日も数人の子どもがゆっくり



たい！と
一歩踏み出
すと、随所
にアートが
あることに
気付かされ
る。上の写
真は階段の



の一つ。ここでは子どもも大人も夢中になって暮らしている、そんな息づかいが感じられる。

◆鎮守の杜で シイの木の話

保育園を出て鎮守の杜に向かう。雑木林のような所を進むと、少し開けた所に、ツブラジイの大木があった。岩屋保育園では特別に大切にしている樹だという。

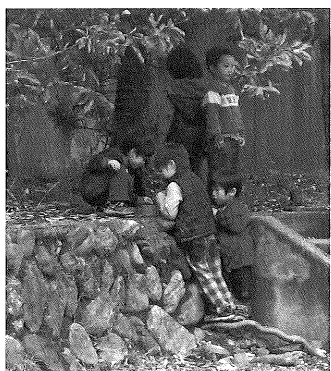
秋にはポタポタと実が落ちる。その実



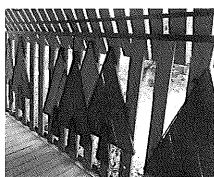
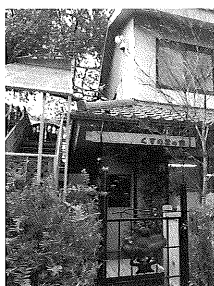
絵を描いていた。アトリエの壁際にあるイーゼルには描きかけのデッサンや水彩画が置かれている。机の上にはいろいろなオブジェが飾られていた。上の写真はその中

を、水を張ったバケツに入れ、水の中に沈んだ実をプランターで育てる。このようにして年中組の秋に育て始めたシイノミは、やがて芽を出し育っていく。そして卒園式はツブラジイの樹の下で行うのだという。卒園する子どもたちと保護者だけが参加する卒園式。ツブラジイの苗が、卒園する子どもたちに手渡されていく。伸びていく喜びや大木へのあこがれを胸に、一步一步歩みを進め育っていくことの大切さや、命のかけがえのなさを感じ取る、とびきりの卒園式なのだろうと思った。

その先に広場があつて子どもたちが遊んでいた。あちこちで額を突き合わせ、身を寄せ合っている。



◆リビングのような部屋で食事をする一歳児

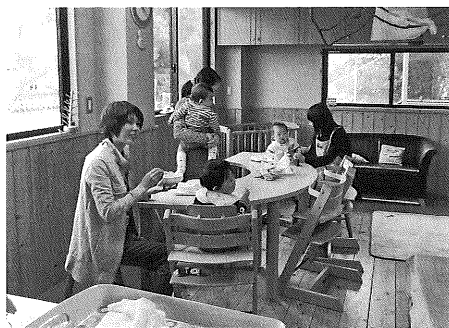


○歳一

歳児の保育室は別棟にある。そちらへと向かう通路にはすてきな樹の飾りがあつて心惹かれた。

室内にはリビングにあるようなテーブルと椅子があり、隅に置かれているソファも家庭的な感じを醸し出している。窓からは緑が見えて、別荘に來ているような感じもする。

穏やかな表情でご飯を食べさせている方に「おいしそうですね」と声を掛けたら、「うちの子は昨



日入園したばかりなので、ご飯を食べさせに来てくれるんですよ」という思いがけない返事が返ってきた。保育者だと思つて話しかけた方は保護者だったのだ。保護者が保育の中に加わっている感じがとても自然で、親も子も安心して岩屋保育園での暮らしを始めているように感じた。

◆子どもたちの暮らしが見える おいしい時間

「今日は焼きそばだよ」という情報がおいしい匂いと一緒に伝わってきた。どうやら焼きそばは人気メニューのようだ。遊び終えた子どもたちが保育室に集まってきた。

窓辺には座卓が幾つも並べられていて、ここで食べよう、と思つた子どもたちが自分で



▲取り分けるのは自分たちの手で

場所を決めて座っていく。

大皿に盛りつけられた焼きそばやおかずは、子どもたちの手で銘々の皿に取り分けられていく。そのような生活が積み重ねられているのだろう。たくさんの子どもが集まっているのに、落ち着いた雰囲気は漂っている。取り分けた皿を差し出す手と受け取る手、柔らかなしぐさの重なりは、まるで家族のようだった。

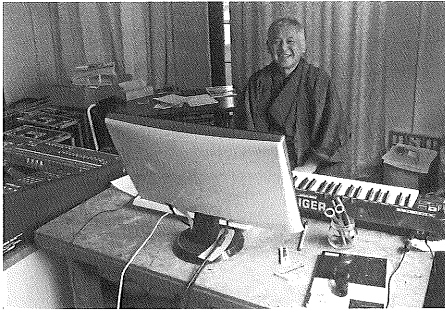
あいさつをして食べ始めた子どもたち。同時に中央のテーブルに大量の焼きそばやおかずが並んだ。おかわりテーブルだ。食べ終わった子どもたちが、次々におかわりにやって来る。どれにしようかなと迷つたり、どのくらいよそおうかなと考えたり、子どもたちの目は真剣そのもの。たくさん食べて、たくさん遊んで、子どもたちの時間は確実に積み重なっている。



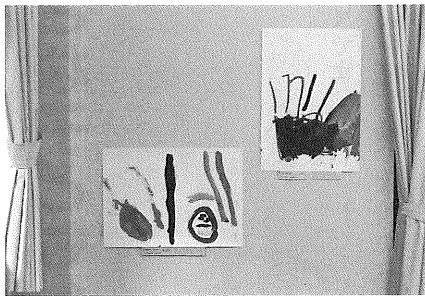
▲おかわりタイム 何回でもOK!

◆歌が生まれる・歌を楽しむ生活

大学時代はジャズが趣味だったという室田先生。保育園の先生が結婚される時には、お祝いにその人のイメージで歌を作ってプレゼントするのだという。歌作りのコツが知りたくて質問してみたら、「歌を作るっていうことは、考え続けること。その人のことをずっと考え続けていると、ある時、パツとおひてくる」という答えが返ってきた。



保育園の先生たちも画家の藤田先生も作詞し、そこに室田先生が曲をつけ歌にしていく。子どもたちの愛唱歌となり、CDに録音していくそうだ。園内にはスタジオがあつて、たくさんの楽器や機材がそろっている。作曲している時の雰囲気でお願ひします！とリクエストしたら、今日一番の笑顔が返ってきた。



目の前の子どもについて語ることで保育の中で大切にしていることを確かめ合い、岩屋保育園では保育課程が作られている。77ページにもわたる重厚な保育課程はホームページで閲覧できる。岩屋保育園の穏やかな時間の流れや室田先生の笑顔を思い出しながら、保育課程をじっくり読んでみようと思う。訪問者／鍋島恵美（京都教育大学附属幼稚園前副園長）

宮里 暁美

文／宮里暁美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

— 訪問メモ —

訪問時期：2013年4月
訪問場所：社会福祉法人岩屋保育園
〔住所〕 京都府京都市山科区
大宅中小路町 65 - 8
〔電話〕 075-571-5790

大学の中で育つ小さな子どもたち

濱崎由紀子

(保育所保育士)

いずみナーサリーはお茶の水女子大学の敷地内に位置し、保育室は附属幼稚園の『お山』に面し、〇歳から三歳未満の二十人ほどが在籍しています。利用日数選択型のため、全員が毎日そろろうわけではなく、子どもたちが出会ったり友達も曜日によって異なります。

ナーサリーのお散歩

ナーサリーのお散歩は、主に大学構内に行きます。子どもたちの格好の遊び場となるのが、『中庭』と呼んでいる本館の建物に囲まれたスペースと、『広場』と呼んでいる学生会館前庭の芝生スペース

です。

『中庭』は、本館からほかの建物に抜ける通路でもあり、建物出口の階段やスロープ、学生用の連絡掲示板などがあります。中央の大きな枝垂れ桜の周りは芝生スペースで、子どもたちは、芝生で虫を探し、階段やスロープの上り下りを楽しみ、掲示板や照明灯を挟んでかくれんぼをしたり、ベンチをステージにして歌ったりします。マンホールのふたにたまった小さな水たまりでさえも、「モグラの穴かな？」と指でつついたり、ぬれた指先でお絵かきが始まったり、広い戸外での小さな遊びも見つけます。

階段下の暗くて冷たい空気穴は「おぼけちゃんのところ」と呼び、子どもたちは声を掛けたり、葉っぱや花のプレゼントを届けに行ったりします。冷たい風が吹き、不思議な音がすると、緊張した表情になります。格子に隔てられている余裕があり、保育士の手を握っていることで勇気を振り絞っているようです。遊び場として作られたわけではない『中庭』ですが、大人が思いつかないような楽しみ方を見つけ、飽きることなく遊びます。



『広場』は、芝生の地面が広がり、草丈が伸びた雑草や植え込みは、子どもたちから見るとちょっとしたジャングルです。少し伸びた草を飛び越え、茂った草の間を通り抜けることで、達成感や自信をつけるようです。初めは地面に足を下ろすことさえ勇気が要った子ども、土を触り、草を抜き、

凸凹に足をとられながらも歩いて転んで立ち上がって、地面の手触りや温度の違いを感じ取るうちに、気持ちも動きも柔らかなるようになります。

『広場』の真ん中にはS字カーブのコンクリートの通路があります。落としたボールが通路を転がる様子を見た二歳のK男が、「ドンブラッコッコ、ドンブラッコッコと流れていきました」と『ももたろう』の一節をつぶやくと、ボールを追いかけていたほかの子どもたちも立ち止まり、流れていくボールを見送っていました。子どもたちの心の中で、一瞬のうちに通路が川に姿を変えています。



子どもたちが歩く大学構内は、学生が次々と通り、職員の方も行き来します。出会う方々からの温かいまなざしを感じ、時には声を掛けてもらっ

て喜んだり（あるいは恥ずかしくなったり）、時には通る方のお邪魔になったり（あるいは子どもが道を譲ったり）と、保育士以外の大人とのふれ合いがあります。

大学構内という安全が確保された場でのびのびと遊べることは、安心と環境面でもありがたいことです。そして、周りの人に温かく迎えられていることは、子どもにとっても心地よい場になるようです。遊び場として作られていなくとも、大人の環境として安全で清潔な場所は、子どもにとっても安心して活動できる場所なのだと感じます。これは、ナーサリーの子どもたちが大学構内を散歩するようになって十余年で、少しずつ育まれていった環境でもあるのかもしれませんが、感謝しています。

言葉で伝わる育ち

ナーサリーで過ごす子どもたちは三歳未満の幼児ですが、言葉から成長を感じる場面が多くあり、

子どもから伝わってくる気持ちの豊かさ、言葉で伝えることの大切さに気付かされます。心に残った場面を紹介します。

植えてあるの？（K男・2歳11か月）

『中庭』で「おぼけちゃん」へのプレゼントの葉っぱを探していたK男が、私の隣で雑草の花を折り取ろうとして手を止め、「これ植えてあるの？」と聞きました。「植えてあるのじゃなくて、生えている草よ」と答えると、安心したように折り取り、私に向かって「はい、たんぼぼだよ」と手渡してくれました。

ほんの一瞬のことですが、「植えてあるのは折ったらだめかな」という気持ちで手が止まり、それをそばの大人が認めてくれたことで安心して折り取り、優しい物腰で手渡してくれる……こんなに小さな子どもの心の心に、これほどの思いや判断や経験が積み重ねられて、それを言葉で伝えるのかという、驚きとともにとても印象的な出来事でした。

どうしてお口とほっぺが動くの？（S男・2歳11か月）

昼食時に友達が食べる姿を見て、S男は「食べている時は、お口が動くかどうかとどうしてほっぺが動くの？」と尋ねてきました。S男は発見したことや家で聞いたことを保育士に話してくれることも多く、うっかりすると聞き逃してしまうようなこともあります。また、どんな言葉で返すか、言葉選別に苦心することもあります。この時は、「S男くんのほっぺも動いているよ」と私が言うと、ほかの子どもも「ほんとだ、〇〇ちゃんのも動いている」とお互いの顔を見合わせながらの和やかな食事場面となったのですが、S男のハテナには答えられなかったかな、と思いました。

入れてみようか（N子・2歳11か月）

ナーサリー前庭の砂場で遊んでいた時、混雑した砂場の中には入りにくかったN子が、小さなカップを手持って砂場を眺めていました。私が「お

砂入れる？」と聞くと黙っているの、「入れなくていい？」と聞くと首を振り、「じゃあ入れる？」と聞いても首を振ります。少しすると、N子は「入れてみようかな」と答えました。「入れる」とか「要らない」ではなく、「入れてみようか」という言葉が、とてもしなやかに大らかで、〇か×だけでなく、受け入れてあげようかな、その先に面白いことがあるかもしれないしね……という気持ちが伝わってきて、こちらの気持ちが柔らかくなる瞬間でした。

子どもからの言葉で育ちを感じることはもちろんですが、大人の言葉が子どもたちを育むことは言うまでもありません。日々の保育では、物だけでなく、人の存在、人が醸し出す雰囲気すべてが環境となっていることを感じます。保育の場にいる大人の動き、動作、言葉のすべてが子どもたちへの環境となっていることに向き合いながら、小さな人たちとの生活を楽しまたいと思っています。

子どもたちの「^①現在^②」を^③考える

少子化のメリット

本田和子

(児童学者)

子どもは「どっ」「で」育つか

少子化によって、子どもは「保育施設」という「場」をすみかとし、「子どもの群れの中で」、あるいは「群れと共に」成長していく。この物言いは、あまりにも逆説めいて響くだろうか。何しろ、子ども数の減少は子どもの「群れ体験を疎にする」という一般的な定説に対して、真っ向から異を唱えているからである。

しかし、人口減少社会は、女性の知的・身体的労働力を不可欠とするから、女性の社会参加と経済的活動は社会的必要事となろう。女性は家庭の管理者であり、家事と育児を責務とするという「近代的性別役割論」は、いずれ無効化されざるを得ないのである。もともと、この性別分業は、女性側の諸意欲につき動かされてすでに崩壊し始めてはいるが、それが、社会的要求ともなる時代を迎えているということであろう。

本田和子（ほんだますこ）
 児童学者。お茶の水女子大学前学長、名誉教授。
 『異文化としての子ども』『子ども 100年のエボック』
 『ぞれで子どもは減っていく』など著書多数。

子どもは「家庭」と多様な「保育施設」との往還を通して、大人たちとのつき合い方と、子ども同士の交わり方の両方を、当然のこととして学んでいくことになる。どちらが「主」、どちらが「従」というのではなく、そのどちらも子どもの成長を支援する「場」なのであり、時間の長短でいうなら、「保育施設」の側に軍配が上げられるかもしれないのである。

とすれば、「子育て力」の向上が期待されるのは、母親・父親であるにまして、施設の働き人ではないか。そして、私どもが脱却すべきなのは、「近代型家族観」であり、「近代型子育て観」ではないだろうか。

子どもは、「誰のもの」か

子どもの成長が、家庭にまして保育施設により多くを負うという、今後の方向性を考えておくとするならば、いま一つ、子どもは「誰のもの」かという問いにも向き合っておく必要がある。「誰のもの」という言い方に語弊があるとするとするならば、「養育責任は誰が負うべきか」と言い換えてもよい。

この問いに対して、最も一般的な答えは「両親」であろうし、特に「母親」により多くの比重がかけられているようにも思える。わが国の場合、民法上に「親権」という一項が含まれていて、大人と子どもの関係の基本を、「親と子の関係」と規定してさえあるのだから。「親権」の内容は、現在では「監護教育権」と「財産管理権」であるとされている。

しかし、親と子の関係が「支配」から「保護」へ、さらには、子どもの権利や人格を「認める」方向へと変化しつつある時代的動向を受けて、親の権利にまして「子どもの保護に

関する社会的コントロール」こそ必要としたイギリスや、「親の権力」を「親の配慮」と改めたドイツの例に見られるように、いわゆる「親権」の概念も変わらざるを得ないのではないか。子どもの養育、すなわち「子育ての営み」は、時代の進展と人権意識の高まりを受けて、「親の独占」から抜け出しつつあると言うべきかもしれない。子どもは、「親のもの」ではないのである。

諸外国に比して、わが国の場合は、親による「子どもの抱え込み」が強いと言われている。加えて、子どもの不祥事を「親の責任」とみなす周囲の目も、他国に比して厳しかったと言えそうである。しかし、昨今の事情を見るなら、「変化のきざし」を認めざるを得ないのでないか。事が起れば、矢面に立たされるのは「学校」であり、「保育施設」なのだから。子どもは、「親の占有物」であることをやめて、学校やら保育施設やらと「公的な諸制度」の中に、「育てる人」を求め始めたということになるか。

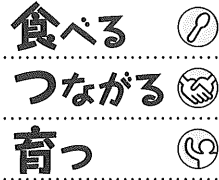
「保育施設の保育」は、「変化」を求められる

人口減少下の社会では、子どもは「家庭」にまして「保育施設」で育つことになり、また、「親の抱え込み」も弱体化するとなれば、施設の働き人たち、すなわち「プロの保育者」の「子育て力」が、従来にまして問われることになる。 「権利主体」としての子どもを尊重しつつ、変化目まぐるしい社会での「生活者」としての子どもを支える。施設保育の中で、とりわけ重視されねばならないのは、子どもの「生活そのもの」であるのかもしれない。比較的長い時間の中で、一人ひとりにふさわしい生活が展開されること、それが施設

に課された役割であると言えるだろうか。時々刻々の「変化」を常態とする「小さい人」が、これもまた時々刻々変化し続ける現代において、一人ひとりがふさわしく「生活していく」ために、大人たちにはどのような支援が必要とされるのだろうか。

私どもが「家族」に抱くイメージは、「父・母・子」というトライアングルを基本とした「近代家族」にほかならない。しかし、近代家族を出現させた近代社会そのものが構造的変化の時を迎えており、その特色とされた「性別役割分業」や「子ども中心主義」も解体し始めている。「小さい人たち」が、「大きい人」となるための基本は「家庭」にあるとする神話も崩壊し始めていると言えるだろう。改訂された「幼稚園教育要領」が幼稚園保育の目標として「人間の基礎・基本」を強調するのもこの所以にほかならない。

ただし、一人ひとりの置かれた環境の多様性と、経てきた時間の個別性に目を向け、何を基礎・基本と考えるかは、「一人ひとり」異なることを忘れてはならない。生活の基本的当為とみなされることを、一人ひとりの差異化のもとに支援すること、それがプロの保育者の使命ではないか。とすれば、従来言われていた「子育ての支援」、つまり、幼稚園や保育所が地域や両親の子育て力を支援するという発想は、逆転させる必要があるだろう。すなわち子育ての主業務を担うプロの保育者を、両親や地域社会が支援するのである。彼らが批判でも要求でもなく、「共に育てるべく支援する」ために、保育施設も保育者も、従来にまして開かれたものであるべきと思われる。



「おいしい、うれしい、たのしい」
 でつながる子どもたち

西野博之

(川崎市子ども夢パーク所長)

川崎市高津区に不登校児童生徒の居場所「フリースペースたまりば」を開設して、二十二年になります。「川崎市子どもの権利に関する条例」の策定にかかわり、現在は条例をもとにつくられた「川崎市子ども夢パーク」の指定管理者として、その管理運営にあたっています。

夢パークの特長は、一万平方メートルの広い敷地に、たき火をしたり、水遊びやのこぎり・かなづちなど工具が使えるプレーパーク（冒険遊び場）があり、その同じ敷地内に不登校児童生徒が通う公設民営のフリースペースがあることです。放課後の子どもたちと不登校の子どもたちが交ざり合って遊んだり、ケンカしたりできる空間があり、いろいろな野菜を育てる畑のエリアもあります。

この夢パークはオープンから今年で満十年を迎えましたが、今でも一年間におよそ二百件近い視察や見学者が訪れます。フリースペースの来訪者からよく聞かれるのは、「ここで大事にしていることは何か」という問いです。その時私は迷わず、「毎日子どもたちと一緒にご飯

西野博之（にしのひろゆき）
 NPO法人フリースペースたまりば理事長。1991年より不登校児童生徒やさまざまな障がいのある人たちと共に地域で育ちあう場を続けている。

を作って食べることで」と答えることにしています。これだけは二十二年間、変わらずに続けていることなのです。

フリースペースの室内にはキッチンがあり、冷蔵庫や食器棚が置かれています。木で作った手作りのいろりや木の切り株の椅子もあります。

午前十時半。フリースペースのドアが開くとすぐに、その日の昼食作りのメンバーとスタッフがいろりの近くに集まり、献立を話し合います。まずは前日の残り物のチェック。そして畑に行つて、今日食べられそうな野菜を確認します。夢パークに到着する前に駅前のスーパーで、その日のお買得の食材をチェックしてから来る若者もいます。メニューが決まると、買い出しに行く人、お米をといで炊飯器をセットする人、畑で野菜を収穫する人、すでにある野菜のカットを始める人など、そこに居合わせた人がそれぞれ動きだします。これは自由な意思によるもので、当番制ではありません。

ここで使うお味噌は自家製です。毎年子どもたちと一緒に仕込みます。昆布、かつお節、煮干しなど、だしにこだわるメンバーも多く、既製のルーなどもあまり使いません。ホワイトソースも小麦粉・バター・牛乳から作ります。カレールーも使わずに、カレー粉のほかに、さまざまな香辛料を組み合わせて楽しんでいます。料理つて、遊びの要素をふんだんに含んだ究極のもの作りだなあつくづく思います。



▲みんなで味噌作り

ここでは毎日三十人から四十人分の昼食を作っています。出来るのはたいいてい十三時過ぎ。「作ってくれた人ありがとう」の声があちこちから飛び交います。「おいしいー。おかわりあるー?」「今日は何でだしをとったの?」。にぎやかに会話しながら、それぞれがちゃぶ台を囲みます。お弁当を持ってきてその輪の中に入る子もいます。その一方で、遠く離れて、みんなに背中を向けて漫画を読みながらカップラーメンをすする子もいます。それもありです。食べることには、それまで子どもたちが過ごしてきた家庭や学校生活の中での緊張を伴っていることが少なくありません。無理やりみんなと一緒に食卓を囲まなくても、まずは安心して食べられる環境づくりを大切にしています。やがて、いつの間にかみんなと同じ食卓を囲むようになった時、実はその場を受け入れ、その場に集う人間関係を受け入れるようになったことに気付かされます。

この毎日の食事作りを通じて、子どもたちは「おいしいね」と語り合える仲間を実感します。「一緒に同じ釜の飯を食べる仲間がいる。ひとりじゃない」。暮らしを取り戻し、つながりを取り戻した時に、子どもたちの中に大きな自信が芽生えます。「作ってくれた人ありがとう」の声を受け取り、人から感謝される体験は、さらにその自信を確かなものにしていきます。おいしいものを食べている時の顔はみんな笑顔。おいしいものを食べながら怒れる人はいません。「おいしい、うれしい、たのしい」でつながる仲間たち。心とからだを満たされて、

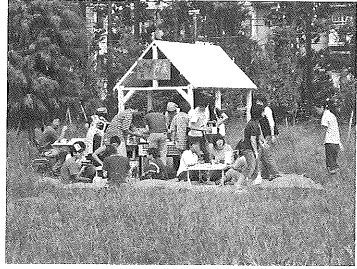


安心が広がると、強制などしなくても、子どもたちは自然と自分の足で、学校など外の社会へと動き始めるのです。

フリースペースで二十年以上、子どもたちの声を聴きながら、感じることはありません。それは、「暮らしのモデルが見えない」ということです。温かい炊きたてのご飯を食べていない子どもが何と多いことでしょう。コンビニで買い置きしたおにぎりを冷蔵庫に入れ、小出しして食べている子にも出会いました。食事を楽しむというよりも、空腹を満たすために餌を流し込むといった表現のほうに近いような食べ方をしている子どもたちにも出会います。一日に必要なエネルギーとビタミンをゼリーなどの固形物や液体で満たそうとする子どもたちもいます。感謝を込めて命を頂くとという経験のない子たちの中に、日常生活の不満やイライラ、ストレスをためている姿を数多く発見します。

さらに言うと、物を壊したり、人からんだりしている子たちの多くは、いつもおなかをすかせています。なかなか言葉が通じにくいなあと感じる子どもに対しては、私たちスタッフはまず彼らの「胃袋をつかむ」ことを心がけるようになっています。おなかが満たされくと、心も徐々に落ち着きを取り戻して、話が通りやすくなるものです。このように、食べ物を持っている力は、子どもとコミュニケーションをとる上でとても重要なのです。

夢パークでは、外でたき火ができるので、「今日は外でごはん食べたいねえ」という時は、「おそとでごはん」。こだわりのさんまの炭火焼き。思い切り煙を出して焼けるなんて、



▲「おそとdeごはん」

何ともぜいたくな環境です。みんなで作ったピザ窯で焼いたピザは、子どもたちに大人気。自分たちで好きにトッピングして、窯の中に入れて待つことわずか三分足らずで、おいしいピザの出来上がり。さらに、大きな竹のまわりに生地を塗って、一生懸命回しながら焼くバウムクーヘンも最高です。

夢パークには年間を通じてたくさんのお保育園・幼稚園から遠足にやって来て、のこぎりやかなづちを使い、たき火を囲んでいます。保育園・

幼稚園の時代から、収穫した野菜を自分たちで切って焼いたり、煮たりして食べる体験は、どんどん取り入れたほうがいいと思います。けがをさせないように、失敗させないようにと包丁を取り上げるのではなく、どんどん使えるようにしたほうがいい。そして安心して失敗できる環境を整えていくことが大事なのです。試行錯誤を繰り返しながら、おいしいものを自分で作って食べる。こんな喜びを大人たちは奪ってはいけないように思っています。

生きる力を育むには、「教育」を「暮らし」から切り離すのではなく、「暮らしの中から学ぶ」という視点が何よりも大切なのだということ、不登校の子どもたちとのかかわりから学びました。



「犬」を主題にした観察絵本

浜口順子
(大学教員)

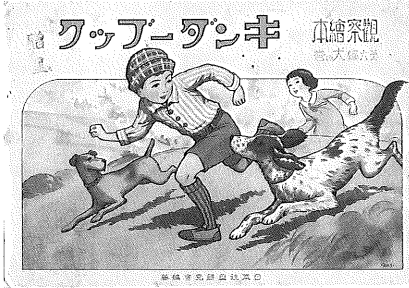
「犬の巻」(第一輯第八編 一九二八(昭和三)年十一月)

先の号でも書いたのだが、昔のキンダーブックを見てみると、子どもの傍らになぜかよく「犬」がいる。今回はその「犬」を主題にした八十五年前のキンダーブック(昭和三年十一月発行)

を一緒に読んでみたい(画像1は表紙)。フレイベル館の書庫に所蔵されている号には、解説のページが散逸せずに残っていた。編集委員山田三郎は、その「編輯余談」の中で次のように記している。

「犬」を主題にした観察絵本は、本書が日本嚆矢です。外国にはその例がないことはありません。しかし本篇ほど豊富な集成と、正確な資料を以て生まれたものは外国にも見当たらないので、本書は『世界一』の犬の絵本だと、顧問の岸邊先生が折^{注1}り紙をつけてくださいました。」

キンダーブックは各号のテーマに関連した専門家が監修を務めるが、



▲画像1「犬の巻」表紙 (的場朝二画)

浜口順子 (はまくちじゅんこ)
お茶の水女子大学大学院教授。

この「犬」の号の監修は高橋虎雄という人だ。山田は、「皆様とうにご承知の、日本一の『犬』の研究者」と紹介している。

「犬」のいろいろ

最初のページで、十五種類の犬が紹介されている(画像2)。高橋虎雄は「日本には、もともと犬の種類が少なかった為でありましょうか、これまで児童の絵本で、正確に犬の種類や特質を描きわけて示したものはほとんどありませんでした。」と解説している。

右上から横へ…ポインター、ウルフドッグ、秋田犬、土佐犬、

二段目…ブルドッグ、ダックスフント、セントベルナード、テン、エ
アデール、

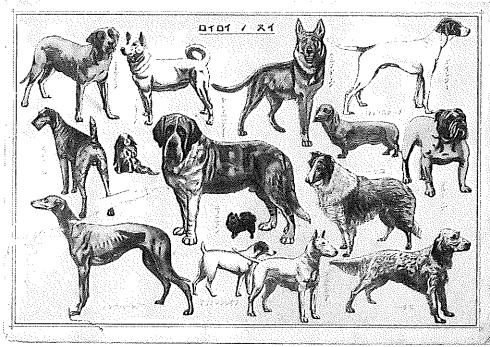
三段目…コリー、ポメラニアン、

下段…セター、ブルテリア、フォックステリア、グレーハウンド。

飼い犬として今一般的なチワワやトイプードル、柴犬、ラブラドルなどは含まれていない。

「イヌコロ」の詞とメロディーの提供

西條八十の「イヌコロ」という詞に寄せて、母犬の周りで五匹の子犬が乳を飲んだりじゃれ合ったりしている様子が描かれている(画像3)。解説の中に、この歌の楽譜が載っている(伴奏譜付き)。四分の四拍子のゆったりした明るい曲調で、幼稚園などで実際に子どもと楽しんで



▲画像2 「イヌ ノ イロイロ」 (十亀廣太郎 画)

歌えるように作られたのだろう。

カアサンノワンワンコドモノワンワン
ソロッタソロッタヒナタニソロッタ
アノコニノマセテコノコヨシャブツテ
セワシイワンワンカアサンノワンワン
オッパイノンダラボクラトアソボウ
アカシロクロブチコドモノワンワン

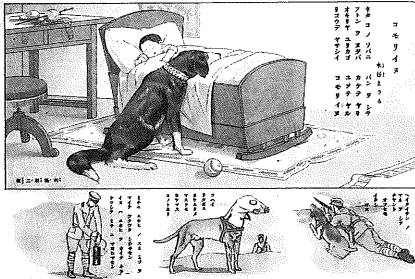
人のために働く犬たち

軍用犬、子守り犬、猟犬など、人間社会に貢献する犬が、(次に紹介する伝説の犬も含めると)全体の三分の一ほどのページを占めて紹介されている。

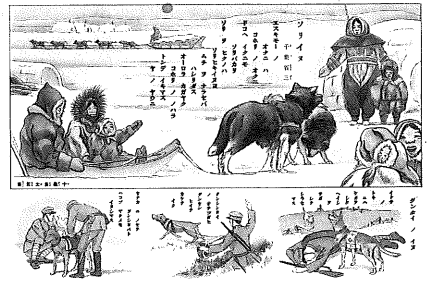
まず、画像4上のそり犬。「エスキモーのお国は氷のお国。どこへ行くにもそりばかり。そりを引くのはそり引き犬よ。むちを鳴らせば、走り出す。オーロラ輝く氷の野原、とんでいきます、矢のように」(千葉県三)。画像5上は、子守り犬。「寝た子のそばに番をして、布団を脱げばかけてやり、起きりゃゆりかごゆってやる。りこうでやさしい子守り犬」とある(水谷まさる)。下段は、見開き左右続きで、戦地で活躍する犬たちが



▲画像3「イヌコロ」(的場朝二画)



▲画像5「コモリイヌ」(的場朝二画)



▲画像4「ソリイヌ」(十亀廣太郎画)

コマ割りで描かれている。負傷兵の存在を知らせたり、電線隊で電線を引つ張ったり。伝書鳩を運んだり、匍匐する兵士の横で伏せておとなしくしたり、臭気線を嗅いで道案内をしたりするなど、犬の有能さには驚かされる。危険な戦地のことだが、毒ガスマスクをする犬の説明文には、不謹慎とは思いつつ、ユーモアを感じてしまう。「こわい毒ガスよけるため、マスクもかけます、このとおり」。全部ではないが、七五調の文章になっている箇所が多く、それが深刻な内容にも軽妙さを加えている。

そのほか、「犬の曲芸」が舞台上上演されるのを、幼稚園の子どもたちや先生が楽しんで見ているという絵もある。現代では、動物愛護精神の見地から、見られにくくなった光景であろう。

伝説の犬たち

私の子どものころ（昭和四十年代）は、名犬ラッシーや名犬ロンドンなど、生活の端々で人間を助ける英雄的な犬が主人公の連続ドラマが毎週テレビで放映されていて、よく見ていた。犬なのに、何でこんなに頭がいいんだろう、何で悪人がわかるんだろうと、うそかもしれないけど本当であってほしい、と思つて喜んで見ていた。

しかしここに登場する「名犬バリー」は実在する犬だったようだ（画像6）。スイスで多くの雪山遭難者を救出したにもかかわらず、間違えて射殺されてしまったという悲劇の犬が、日本でも話題になっていたのだろう。この絵は、も



▲画像6「名犬バリー」（的場朝二画）



▲画像7「ナイチンゲール」(的場朝二画)

ともと横長版のキンダーブックをさらに横開きにした大きさに描かれていて、内容のドラマチックさも手伝って、映画のスクリーンのような迫力を感じる。

次のページは、むしろ人間のほうが有名だ。すなわち子ども時代のナイチンゲールが、けがした羊飼いを優しく手当てしているという図である(画像7)。

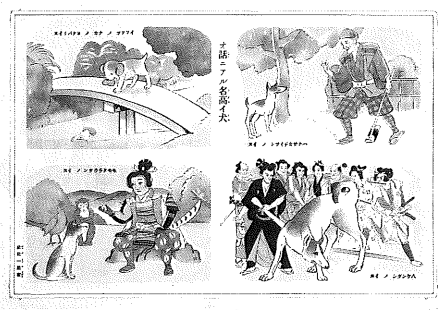
それに続くページは、英雄とは言えないが、子どもがよく知っている話に登場する「名高い犬」たちが、

四コマ割りで紹介されている(画像8)。「花さかじいさんの犬」(右上)、「八犬伝の犬」(右下)、「イソップの中のよくばり犬」(左上)、「桃太郎さんの犬」(左下)。

犬とどうかわるか

犬の育て方を教えるページがある(画像9)。時計と反対回りに一〜六のコマに分かれている。

- 一、寒くないようおうちには わらをたくさん入れてやり
- 二、朝はドッグビスケット 晩にはごちそうどっさりと 犬のごはんは一日に その二度だけでたくさんよ
- 三、夏は泥水のまぬよう たびたびきれいな水をやり
- 四、暖かいころ ぬるま湯で 行水させるも けっこうよ けれど子犬はいけません



▲画像8「お話にある名高い犬」(武田一路画)

五、毎日 わすれず 外へ出し 運動させて くださいな
 六、 一日一度 からだじゅう かたいブラシで こじこじと お掃
 除をしてやりましょう

七五調のおかし楽しい育児マニュアルだ。子どもなら、すぐにそらで覚えて節づけで唱えながら、世話をするかもしれない。近世の暗唱教育の名残ではあろう。子どもが自ら世話している図がほとんどだが、二番は母親（らしき女性）が、四番は父親（らしき男性）が中心に描かれている。都市部において主流になりつつあった核家族が、ペットを仲良く親も参加して大切に育てる、というイメージは、当時の理想型教育家族を具現化したものとも言えよう。

今の日本で「狂犬」に注意、という言葉をもとに耳にしなくなつた。国内の発症はほとんどなくなつたというが、昭和初期はそうではなかつた。野良犬が町の中にも多く、現代の「フシンシャ」という響きに似て、「キョウケン」も子どもには恐ろしく聞こえたことだろう。子を持つ親にとっては高度要警戒対象であつたに違いない。狂犬（病）に関する情報のページがある（画像10）。全体が六コマに分かれており、上の中央にリアルな「狂犬」のイメージが描かれている。「これは狂犬です。口をあげたまま、よだれをたらしています。目はよく見えません。人にも、木にも石にも、かみつきます。かわいそうに、病気にかかったのです。こんな犬にあつたら気をつけてください。」当時の子どもにとって真に必要な情報をわかりやすく伝えながらも、「かわいそうに、病気にかかったのです」



▲画像9 「イヌ ソダテカタ」 (朝二場画)



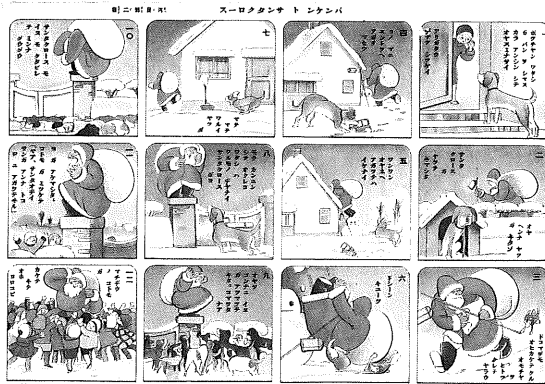
▲画像10「オノロシイ キョウケン」(的場朝二画)

という情も忘れないところに、保育的とも言える配慮が感じられる。狂犬の図以外のコマは、「もしかまれたら」どうするか、処置の手順が説明されている。

犬とロマン

狂犬病の重々しい雰囲気から解放してくれるのは、フィナーレの三ページ(附録も)。犬という存在が、子どものロマン、遊びの世界の中で、再び楽しく息づき始める。

河目悌二(画)による「番犬とサンタクロース」。細かいコマ割りといい、サンタクロースのユーモラスな雰囲気といい、一瞬、レイモンド・ブリッグスの「あわてんぼうのサンタクロース」を思い出す人が多いのではないか。一コマ目で、番犬が「ぼっちゃん。私が番をしますから、安心しておやすみなさい」と言うと、主人である男の子が「ありがとう。じゃあ失敬」と家に入る。そこへ、サンタクロースがやって来る。番犬の懸命の追跡や見張りの末、サンタクロースは朝まで家に入れず、結局、朝になって町中の子どもたちがサンタクロースに会えて大喜び、という筋書きだ(裏表紙には「いろいろなおもちゃの犬」として、ぬいぐるみや、張り子やゴムの犬、外国の人形などが描かれている)。



▲画像11「バンケン ト サンタクロース」(河目悌二画)

出色は、武井武雄（画）による「犬の王様」で、特別な色刷り附録になっている（画像12）。附録については、倉橋顧問の、幼稚園や子ども部屋に飾ってもよいような良質のものが、園の文化的環境の向上に必要なとの考えから、ほとんど毎号ついている。犬の王国のお城から犬たちの行列（しかも歩調などはバラバラの自由な行進）が続き、犬の王様を載せた素晴らしく格好のいい犬の御者。馬車ならぬ「犬車」を引く犬の背中に掛かった布には「ONE ONE!」とある。

都会の過密化とマンション生活の増加、衛生観念の発達、少子化に伴う「安全」への過敏さ、大人の精神的余裕の喪失などによって、犬を飼いにくい世の中になっている。「死ぬこと」が生活の中のタブーになってきていることも関係しているだろう。獣医の中川美穂子は「動物は命があるからこそ、生きている時と死との落差が大きいからこそ、心を震わせるほどの体験を与えてくれます^{注2}」と言う。昭和初期、死は、もちろん犬だけでなく、人間社会のすぐそばにあった。生死という問題を挟んで、犬と人間はより身近な関係にあった。

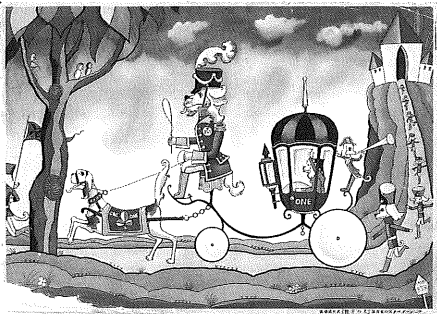
― 続く ―（引用は、現代文字・仮名遣い等に変えてあります。）

注

1 東洋幼稚園園長の岸邊福雄。海外の児童文化の導入に積極的で、当時、

倉橋惣三と共にキンダーブックの編輯顧問。

2 中川美穂子『動物と子ども』フレールベル館 一九八八年 p.105



▲画像12「犬の王様」（武井武雄画）

イタリア保育

おもいきって

参観記 (4)

三大ラボラトリーオ ベネト州パドヴァ市

金澤妙子
(大学教員)

勤務先の海外長期研修制度で、私はイタリア・エミリアローマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間滞在した。その七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。

今号は滞在中、月平均二回程度と日数は少ないが、一園に絞って一年間継続観察したベネト州パドヴァ市の公立幼稚園を紹介する。



▲訪問園近くの公園プラト・デッラ・ヴァッレ



パドヴァ市公立幼稚園との出会い

イタリアの学校暦における夏休みは長い。しかも五月下旬になるとバカンスに出かける家族や職員が開始、子どもも職員も全員がそろふことはなかなかない。気分も雰囲気もバカンスモードに入っている。パドヴァ市在住の知人のお子さんが通う園では、それを見込んで、年度末の修了フェスタ(本連載(2)参照)を五月の最終土曜日に終えていた。六月末、学校暦が終了すると、園が開くのはたいいてい九月半ば。滞在地リミニ市でも開園は九月十七日、保育者は九月の第一週から新年度準備に向けて勤務する。

そうした中で、パドヴァ市では、九月第一週から子どもが登園している。二〇一〇年、研修下調べに出かけた際、知人のお子さんの三歳児入園初日に行した。日本の入園式のようなものではなく、午前中だけが通常の登園風景、部屋には、「ようこそ〇〇(新入園児組に対して)、お帰りなさい〇〇(進級児組に対して)」の壁面装飾。遅くとも八月最終週には保育者が勤務に就いていることが想像され、システムとして整っているという感じを受けたことが観察依頼のきっかけであった。

ずっと異年齢保育で

パドヴァ市は人口約二十万、北イタリアの大学町である。「表面をさらっと通り過ぎるのではなく、一年間の様子を継続して見たい」という私の希望に同市教育委員会が用意してくれた園は、観光スポットにもなっているPrato della Valle (冒頭写真)という、堀に囲まれ彫刻に縁どられたような美しい公園近くにあった。園の周囲は緑多い住宅地である。

市内に十一ある公立幼稚園はすべて三歳児からの異年齢保育。教育委員会での初打ち合わせで、少子化がその理由かと問うと、幼稚園を統括する担当者^{ベテコジスタ}は、次のように説明した。「三歳児だけだと、一人が泣きだすとほかの子も泣くようなところがあるが、縦割りなら小さい子は泣くかもしれないが慰める子もいるなど、子ども同士が助け合うことも出てくる。それがまた、子どもの成長を助ける」。三十年以上パドヴァ市公立幼稚園に勤務する二人の保育者は「ずっとこうよ、横割り編成だった時やそういう園はないわ」と言う。教育委員会が言うような年上の子どもが年下の子をいたわる場面はもちろんあるのだが、社会性や規範意識が育ってきた五歳児が、やってはいけないことをしている三歳児を注意したり、諭そうとして、三歳児の奔放さに負けて泣きだしてしまふ場面などを、私はとても面白く見た。

一クラスには、二十五名の子どもと二人の保育者。何クラスあるかは園によって異なる。保育者の勤務時間は六時間、登園時からいる保育者は十四時まで、

十時に出勤する保育者は十六時までという勤務体制はリミニ市と同様であった。私が観察した園では毎年年度初めの九月に、カリキュラムの担当者と建物や物質・環境的なことを担当する保育者を話し合いで決めて園内の職務を分担し、その人を軸に動いていた。この園の二人の担当者はたまたま三年間継続して、分担している事柄に精通しており、私の質問にいつもの確に答えてくれた。

LABORATORIO

パドヴァ市の保育で書いておかなければならないのは、ラボラトリーだ。この連載(2)でも園への両親の参加について紹介した際に出てきた言葉だが、それとは違う。例えば宝石を作っている工房でもラボラトリーオという看板を掲げていて、この言葉は街中でもよく見かける。

ボローニャ市やリミニ市の保育では、絵の具やトウモロコシの粉を思い切り使う部屋やそこでの活動をラボラトリーオと呼んでいた。リミニ市の幼稚園

では、クラスの一隅に小さなテーブルと椅子を置いて、保育者と一対一かごく少数で制作をするような時にも、この言葉を使うことがあった。子どもの作業に、幼児には高度なテクニックを保育者が加える。保育者の手助けでミックスした素材使いのアイデアや平面と立体のコラボレーションなど、私が日本の園では見たことのないようなものに仕上がっていた。

ほかにも、ジョコgioco libero (自由遊び)、アッティベタattività (活

アッティベタattività guidata (指導的な活動)、アッティベタattività libera (自由な活動) などがあり、私はよく、「これ

は？ それとも？」と確かめた。はっきりと答えが返ってくるものもあったが、保育者自身、限定し難いものもあった。コーディネーターチェ(本連載(1)参照)や保育者は、「少数で手を使う」とことと説明する。街中で見かける工房のイメージに近いかもしれない。

パドヴァ市の園で言っているラボラトリーオも、「一定の場所に行き、テーマに沿って作ったり演じたりする」とことと説明される。ただ観察と保育者や

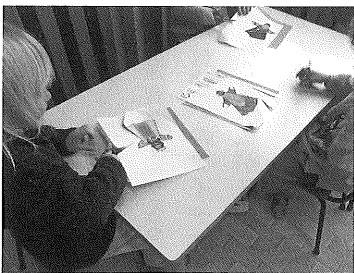
ペダゴジスタの説明から、年間計画（のテーマ）を
実践していく際、集中的に体験させる分野・くくり
のようなものだと思う。特にテーマを設定していな
い園もあるが、ラボラトリーオはどの園にもあり、
どういうラボラトリーオか、その数は各園で決めて
いる。この園には音楽、言語、科学の三大ラボラト
ーリオがあった。外国人が多いと、保育者や周囲の
子どもとの人間関係、その子の生活習慣の獲得など
に言葉の問題が影響するので、言語のラボラトリー
オの枠を広げるなど、クラスや子どもの状態で時間
数は変わることもあるが、これらはいつもある。

今年度のテーマは「acqua（水）^{アックワ}」。園のすぐそばに
巡らされた一五〇〇年代に造られた壁が壊れて新園
舎の工事中で、私が観察した年、園舎はウナギの寝
床のように細長く、園舎に沿った園庭はそのままブ
レンタ川の支流にも沿っていた。川面にはカモやア
ヒルが戯れ、川岸にはいろいろな生物が生息する。
園庭と川岸の境にある網状の柵の下方はめくられてい
て、水際は子どもには魅力的な場所のようだ。カモ

が卵を産んでヒナがかえるのを見たりした時の跡ら
しい。川に至近の立地から決まったテーマだ。

川ではなく「水」になったのは、「前回のテーマが
『虫』で、科学のラボラトリーオが多かった。川だ
と、ともするとまた川辺の生き物のほうにいつてし
まう。もちろん『水』でも、こんなに川が近いので
川辺の生き物は扱うだろうが、『水』のほうが、例え
ば雨も題材にできるなど広がりが出ると子どもの経
験も広がる。前回との重複を避け、保育者も子ども
も新鮮な思いで取り組めると思った」からだとい
う。『水』と音楽のラボラトリーオをどう絡めるかは難
しいように思い、尋ねると、

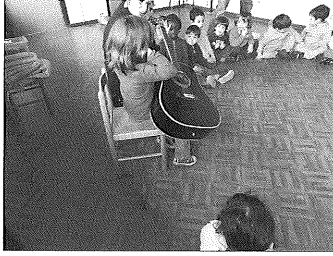
「言語については『水』にま
つわる絵本を読み聞かせたり、
それを劇活動にしていくなど
は話し合っているが、音楽は
確かに難しい。三大ラボラト
ーリオと言っても、テーマに
よっては当てはまらないとこ



▲言語のラボラトリーオ
お話をペープサートにしているところ

ろが出てくる場合もある」。仕方ないわという意味合
いで肩をすくめて両手のひらを広げ、「でも、一つの
ラボラトリーオの中にいろんなものがあるから大し
た問題ではないわ」と言っていた。イタリア人らし
い大ざっぱさというより保育の実際はそんなものだ
ろうと思ひ、納得した。無理に三大ラボラトリーオ
に引き付けるとしたら本末転倒だろう。ラボラトリー
オは、大事にしていきたい分野に過ぎない。

入園当初から二か月ほどは適応^イ見合^セわせ^リ期間^ドで、
子どもが園生活に慣れることを最優先に考えるため
ラボラトリーオはない。十二月までに決め、教育委
員会のチェックを経て一月半ばごろから開始してい
た。リミニ市の教育プロジェクトとほぼ同じである。



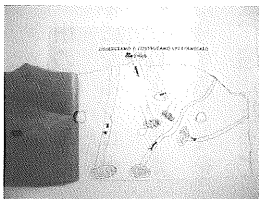
▲音楽のラボラトリーオ

ラボラトリーオは、火・
水・木曜に行われる。朝の
集まりと室内での好きな遊
び（ブロックやパズルなど
の玩具、粘土やトウモロコ
シの粉、描画、ごっこ遊び

など）の後、十時半ごろから同年齢編成になる。こ
の園は三クラスあるが、どのクラスにも共通した各
年齢を呼ぶ名前（例・三歳児^Ⅱこぐま）があり、各
クラスのこぐまが階下で音楽のラボラトリーオ、四
歳児は○組で言語のラボラトリーオ、五歳児は△組
で科学のラボラトリーオという具合である。各年齢
のラボラトリーオは基本二か月ごとに変わり、三つ
がローテーションする。かつて私が勤務した大学の
幼稚園も縦割り編成だった。午前は通常のクラス（異
年齢）で過ごし、午後は同年齢で活動する。かなり
重なる部分があった。

ラボラトリーオの実際〈複合性〉

今年三月下旬、科学のラボラトリー
オで、子どもたちはお手製のメモ
用紙を首から下げて、川にかかる橋
の上からカモやアヒルを観察しに出
かけた。前年度、園庭の虫やアリの
巣を観察する時にもやった方法であ



▲科学のラボラトリーオ
「アリの巣を観察して作ってみよう」

る。今回は園の敷地の外にいる生き物の観察なので、保護者の外出許可が必要である。子どもたちの水鳥への興味・関心、それを園庭から金網越しにはなく橋の上から見たい、読み書きのできない子どもたちのそういう声を、保育者が両親へのお願いとして大きな紙に代筆し、その周りの白いところに子どもたちが署名したものが園舎の入り口近くのスペースに張り出されていた。

リミニ市の幼稚園でも時折、子どもたちは市役所所有のスクールバスで園外へ出かけた。クラスの戸口に張られた園外保育のお知らせの下には園児の名前を書いた用紙があり、許可する保護者は自分の子どもの名前の脇に署名をしていた。みんなサインをするが、許可なしに連れていくことはできないのは常識のようであった。

門や柵どころか、周囲の田畑や住宅地と園の敷地を仕切るものが一切ない郷里の保育環境になじんだ私には、すぐその橋に行くのに何と窮屈なと思うことではあったが、もちろん両親と教育委員会の許

可が下りて出かけたそうだと。

ラボラトリーオとしては科学だが、川の生き物に対する自分の思いを言葉にする、活字になるプロセスは、言語のラボラトリーオでもある。科学のラボラトリーオでは、実際に見たり触れたりすることを大事に考えている。テーマ『虫』では、畑に行って虫を探そう(三歳児)、どんな所にどんな虫がいるか(四歳児)、五歳児になると「足が何本あって」と虫にかかわる目的は細かく具体的になる。四歳児では、バッタを庭で見つけたことからバッタになってみる、見たもの(毛虫)を描いてみよう、音楽のラボラトリーオの中の活動として「音楽を聞いて感じたことを絵にする」などという記述もある。日本の保育内容「領域」の重なりと似ているが、学習の要素は、よりはっきりしている。「庭で捕まえたテントウムシを放してあげた」と言うので、日本では飼うことも多いと話すと、「放すことも見せたい」そうので、園では飼わないという点は違っていた。

— 次号は最後です —

研究

『幼稚園』の原著者

ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 2

企業家マイヤー家の人々

1 立志伝の人、H. C. マイヤー

(二七九七—一八四八)

ベルタの父H. C. マイヤー（以下、マイヤー氏と表記）は、六歳の時（一八〇三年）にブレーマーハーフェンからハンブルグに家族と移住し、八歳の時には父親の製造した杖を路地売りして家計を助けていた。学歴はほとんどなく、夜間学校（一日二時間開校）にひと冬通い、その後は不定期に通っただけであった。それが、二十年もたたぬうちに、マイヤー氏は小さな町工場から大企業へと事業を拡大し、「杖のマイヤーさ

ディーター・レドナック（史学博士）



翻訳／ベルガー有希子（公立幼稚園教諭）
解説・写真提供／大戸美也子（幼児教育史研究者）

ん」の愛称でみんなから慕われるようになっていた。

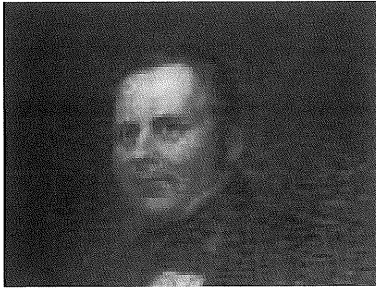
― 職人から工場主へ ―

十八歳で父の工場から独立。ブレーメンの工場で働いた後、十九歳（一八一七年）に『H.C. Meyer, jr.』を起こした。間借りの小さな工場からのスタートであった。成功の要因として、勤勉さに加えて彼の開放的な性格も挙げられる。彼は積極的に新技術の導入を図ったばかりでなく、政治的見解や社会問題についても革新的な考え方を持っていた。マイヤー氏は一八二八年に健康保険制度をいち早く取り入れ、従業員の病気

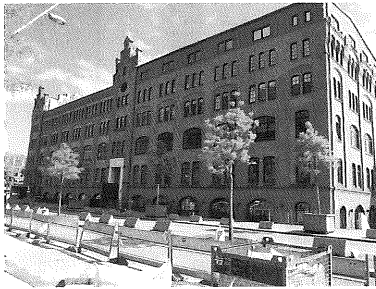
のみならず、未亡人や従業員の家族の健康にまで配慮する先進的な内容であった。工場の従業員を自分の家族の一員のように扱い、そのことにより社員からの信頼も厚かった。マイヤー工場の製品は、品質の高さで絶大な人気を誇っていた。起業後一年に、四人を雇い入れ、一八二二年には十二人、一八四八年には三百人以上の従業員を抱えるまでになっていた。

― 海外事業と社会事業への広がり ―

マイヤー氏の事業で、もう一つ特記すべきことは、ハンブルグで初めて工場にスチームエンジンを導入



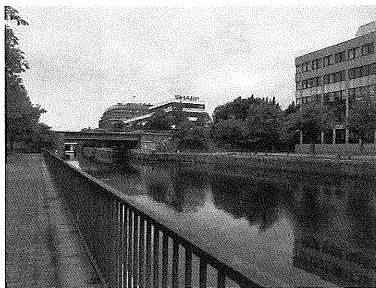
▲マイヤー氏の肖像



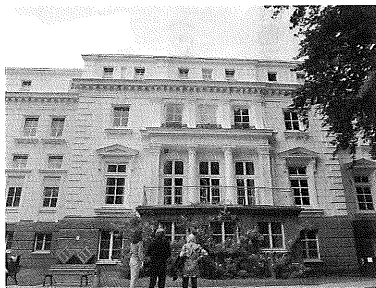
▲杖工場

したことである。取り扱う商品も次第に増え、原料を自分で買い付けに出かけたり、イギリスへの販路もつくった。一八四八年には、アメリカの取引先への訪問と同時に、長男ハインリッヒ・アドルフが興したアメリカ支店（一八四一年開業）も訪れている。

事業が順調に発展するのと並行して、マイヤー氏はハンブルグ市の都市開発事業にも力を入れた。当時、衛生面や経済面で後れを取っていた港湾地域の開発に乗り出し、水路を作り、人々の生活改善に一役買った。彼の功績をたたえる記念碑はハンマーブルック地区に現存している。



▲マイヤー氏が開発した水路



▲マイヤー家別邸

2 マイヤー家の肖像

— H. C. マイヤーの二人の息子 —

マイヤー氏は、富を急速に築いたように、子どもたちの数もあつという間に増やした。一八三三年、彼が三十六歳の時には、娘九人と息子二人の子持ちとなっていた。しかし、そのうちの三人は早死し、三女ユリアは十一歳で亡くなったので、成人したのは七人である（写真「マイヤー家の家族の肖像」^註参照）。妻アガタ（一七九六—一八三三）は、貧しい家庭出身で、二人は夜間学校で知り合い、彼が十八歳の時に結婚し、二人は仲むつまじく温かい空気のある家庭をつくった。残念なことに、アガタはマルガレーテを出産後に若くして亡くなった。

二人の男児のうち、長男ハインリッヒ・アドルフ（一八二二—一八八九）は、経営者として成功するだけでなく、海洋学者としても一目置かれる専門家になった。また、父親と同じ名前の二男のハインリッヒ・クリスチャン（一八三二—一八八六）は、父親の後継

者となり、工場をハンブルグからハーブルグへと移し、世界に名だたる籐製品製造会社へと事業を発展させた。長男ハインリッヒ・アドルフは、『H. C. マイヤーの思い出』という本を著わし、父親について次のように述べている。

「父は、ノイエンブルグの家のすべての階の多数の部屋や仕事場に同時に姿を現すことのできる陽気な人であった。彼を探す人は、少し耳を澄ませば、彼の歌うフォークソングや、有名なアリアの一節が聞こえてくる。マイヤー氏は、歌を芸術的だから好んでいたのではなく、自分の歌声で従業員が彼の出現を予知できる配慮をしていたのだった。」

— H. C. マイヤーの五人の娘 —

マイヤー氏には、五人の娘が成人した。長女アマリエ（一八一六年生）、二女ベルタ（一八一八—一八六三）、四女テレーゼ（一八二三年生）、五女アガター（一八二六年生）、六女マルガレーテ（一八三三—一八七六）である。マイヤー家の女兒の教育については、

大戸美也子（おおとみやこ）

長年、保育者養成・現任保育者の再教育に従事。近年は、幼稚園教育導入に関する日英米の比較研

あまり語り伝えられていない。二人の兄弟たちのように学校へ通うことはなく、家族同然のつき合いをしていた漫談師、グロイの弟が家庭教師として教育にあたったに過ぎない。

教育について口出ししなかったマイヤー氏だったが、娘の結婚相手は慎重に選択したようである。一八三四年の春に、長女アマリエは家族の友人であるカール・ヴェステンダルプと結ばれ、結婚後すぐにマイヤー家の会社に就職した。その数か月後には、長女の婿、K.



▲マイヤー家の家族の肖像

ヴェステンダルプの仲介で、二女ベルタは十六歳で、ハノーバー王と結婚したケンブリッジ公爵夫人の私設秘書であったフリードリッヒ・トラウン氏と結婚した。^{注2} 四女のテレゼは、その父親がブレーメンの商館でフリードリッヒ・エンゲルスのもとで学んだという商人ロイポルド氏に嫁ぎ、また、五女のアガータはロシアの宮中顧問官に嫁いだ。娘たちが次々と良縁を結ぶことができ、妻に先立たれて意気消沈していたマイヤー氏も元氣を取り戻したといわれている。

3 フレーベル教育に魅せられた娘たち

ーフレーベルをハンブルグ市へ招いた長女ー

長女アマリエ・ヴェステンダルプは、「貧困者と病人のための女性の会」に属し、早くから貧困家庭の子どもたちの世話をする奉仕活動にかかわってきた。その活動を通してフレーベル思想に出会い、やがてヨハンナ・ゴールドシュミット夫人の率いるユダヤ教の婦人団体と交流を深めて「ソーシヤル協会」の結成に関与したことは、グロレ氏の論文で紹介されている(本

誌夏号参照)。また、この協会でハンブルグ市に幼稚園を開設しようと、幼稚園の生みの親であるF. フレーベルを招いて幼稚園教員講習会の開催を提案したのも彼女であることについても触れている。

彼女はあまり前面に出ることをしない性格であったせいか、彼女についての記述はあまり多くは残されていない。しかし、彼女こそフレーベルに魅せられるマヤー家姉妹の最初の人物であったことは確かである。

—アメリカで最初の幼稚園をつくった六女—

六女マルガレーテについては、すでにドイツ、アメリカで伝記が出版^{註3}されているので、その履歴について簡単に触れるにとどめたい。

彼女は、誕生時に母親を亡くしたが、しっかり者の娘の多い家族の中で、十分な世話と愛情を受けて育った。しかし、家系上の特徴か、十一歳年上の長兄ハインリッヒ・アドルフ同様、理由のない悲しみと憂うことに悩まされることがあった。

マルガレーテは、一八四九—五〇年の冬にハンブル

グで開催されたフレーベルの講習会に参加し、その受講ノートをフレーベルに送ったところ、フレーベルに「自分のものよりも優れている」と評価されたという。一八五一年十月、当時ロンドンに移り住んでいた姉ベルタに請われて、家事と幼稚園を手伝うためにロンドンへ渡った。そこで彼女はカール・シュルツと出会い、一八五二年六月にロンドンでベルタ夫妻立会いのもと民事婚をした。そして、二か月後に、若いカップルはヨーロッパを後にアメリカへと旅立った。

彼らには、新天地での生活プランがあったわけではなく、シュルツ氏のどんなことにも屈することのないポジティブ思考だけが頼りだった。そのような楽天的な夫とは異なり、マルガレーテは生活の変化に順応するのに苦労した。シュルツ氏は何の資金も持っていなかったため、妻のハンブルグからの持参金で生活を立てていた。フィラデルフィアに住んでいた一八五三年五月三日に、長女アガーテが誕生し、その二年後には、ウイスコンシン州のウォータータウンへ移住した。そこにはドイツからのシュルツ氏の親せきが大勢移住し

ていたので、カールは永住する決心をし、住居と農場を手に入れた。

一方マルガレーテは重度のホームシックに悩まされ、定期的にハンブルグへ戻る生活を繰り返していたが、何か使命を持つ必要性に気付き、子どもの保育の分野に使命を見いだしたのだった。

この時期、アメリカでフレibelを直接知っているのは、マルガレーテただ一人だった。まず彼女は、自分の幼い姪たちを自宅に招き、その後、近所のドイツ人子女も集まるようになっていった。そこで、ハンブルグやロンドンの姉のもとで学んだことと一緒に歌を歌ったり、遊んだり、積み木を積んだりすることを実践したのである。自宅が郊外にあったため、市街地にあるカールの両親が所有する木造の家へ引越した。そこはアメリカで最初の幼稚園として、今では修復された建物に記念碑が残されている。

注

1 この写真の下方に「一八三四—一八四四」の年号が

入っている。本稿執筆者レドナック博士によれば、この時期に生存していた子どもたちの写真を集めて家族の集合写真を作成したとのことである。中央の両親を七人の子どもたちが取り囲んでいる。一番上部は長女アマリエ、二段目左側は長男アドルフ、右側は二女ベルタ、三段目左側に四女テレゼ、右側に五女アガーテ、そして下段左側が二男クリスチャン、右側が六女マルガレーテの構成となっている。

2 二女ベルタの波乱に満ちた生涯については、冬・春号で詳述するので、本号では説明を省いている。

3 マルガレーテの自伝は、独・米で出版されている。
Gred Stoltz, *Leben der Margaretha Meyer Schurz*.
(Husum, 2007)

Hannah Stwart, *Margaretha Schurz*. (Watertown: Watertown Historical Society, 1967)

後者は、『シユルツ伝』(学苑社 一九八一年)として邦訳され広く知られているが、「マイヤー家はユダヤ教徒」とする等、正確さを欠く記述が多い。

*夏号p.70の注3にある「五女マルガレータ」は「六女マルガレーテ」に訂正いたします(編集部)。

報告

「三歳未満児の保育を実践事例から考える」

～開かれた心を育む柔らかかな生活の場を求めて～

バオバブ保育園ちいさな家園長 遠山洋一先生の講演とバスセッション
お茶の水女子大学ECCCELL第一回保育フォーラムから

菊地知子

(編集委員)

今回のフォーラムでは、まず、日々の小さな事例とそれに対するコメントを、遠山洋一先生から伺いました。そのお話を受けて、グループに分かれてバスセッションを展開。続いて、バスセッションのグループごとに報告を行い、最後に遠山先生から、報告を受けてのコメントを頂きました。

ECCCELL保育フォーラムについて

会の初めに、ECCCELL生涯学習部門のリーダー 榎原洋一先生からフォーラムについて説明がありました。当フォーラムは、今回が第一回とは言いながら、平成二十一年度まで五年間続いた寄付講座「ア

ップリカ特設講座」における土曜保育フォーラムを継承しようという意思から企画開催されたものです。アップリカ特設講座「チャイルドケアアンドエデュケーション」は、現在のECCCELLの前身の最も大きな一つであり、土曜保育フォーラムは、常設講座をなかなか履修できない方々にも学びのチャンスをと、ということで開かれていました。

遠山洋一先生のお話

・遠山先生は、保育とは畑違いのところからの転職組で、四十年前に、バオバブ保育園を東京・多摩市に開設。保育の基礎を勉強しなのまま園長になった

ため、日々の保育の現場での経験値でお話をする。

・大事にしようとしている人間観・保育観として、

① 人に対して開かれた心、外界にも開かれた心を育みたい。

② 人は生まれた時から開かれた心を持っている。

だから、それを大事に育てればよい。

③ そのため保育の場に必要なのは「柔らかさ」だ。

ということを持っている。

・小さなエピソードを保育日誌に書きとめ、それを、保育者同士が見合う。エピソードといっても、その保育の場にはない第三者にもわかるような背景や細かな考察も書く、というようなものではない。園内での話し合いも、ケースカンファレンス、といった硬い言葉でくくるような話し合いではなく、「エピソードを語り合う会」という名で、日々の保育日誌に書きとめられた小さなエピソードを使って行うようにしている。

このように、これからお話しされることの前提を話されて、本題である、以下のように見出しのついた事例をお話しされた。当日配布されたレジュメに従い、項目のみ列挙する。

■〇、一歳児の「開かれた心」の諸相

【事例1】響き合いを心地よく感じる

【事例2】リズムを体で感じ、「共に在る」ことを楽しく感じる

【事例3】友達の姿を見て、自分なりに納得する

【事例4】外れた友達に気付き、手を差し出す

【事例5】友達の失敗を自然にフォローし、笑いに変える

■自分を出す、自分を主張する

■さらに開かれてゆく二歳児の姿

【事例6】友達をケアする

【事例7】虫との体験と気持ちを友達と語り合う

【事例8】自分以外のものに心を寄せ、祈る

■柔らかな生活の場をつくらうとする保育者たち

【事例9】目標は「楽しく食べる」

【事例10】「見守る」ではなく「見て学ぶ」

【事例11】二人の担任と子ども

【事例12】「不器用さ」として受けとめる

【事例13】散歩日和って、こんな日？

【事例14】ごっこ遊びの広がり

■保育者の感じる心 互いを感じる心

バズセッションと全体での分かち合い

百二十余名の参加者が九人十人ずつのグループに分かれて、遠山先生からのお話に基づいて非常に活発な語り合いを行い、その後再び全体で一つに集まって、各グループから手短かに報告し合いました。「感じることできる」保育者になること、役職の違いや上下を超えた柔らかかなつながり・大人同士のコミュニケーションが大切なのではないか、子どもは元来柔らかく開かれており、大人との信頼関係あるいは大人同子ども同士の信頼関係、保育者の安心感安定感によって、その心を十分に発揮することができるとはならないかなど、興味深い語り合いになった

ことを物語るような報告がされました。

遠山先生からは、「つたない話から、大変質の高い語り合いがされたことに驚いた」、という感想を頂き、「保育者が心を動かされたことを、心を動かされた時に素直に書こう、主観的でないんだ、ということ、保育をする者同士で読み合わなければ意味がないので、短い記録でいいので保育日誌に書こう、ということを確認して以来、記録が生き生きしたものになったように思う。一方で、保護者に伝える・伝わる、ということについてはまだまだ不十分であり、また、保護者のことを伝えてもらい、受けとめる、ということも十分ではなく、これからの課題であると感じている」というコメントを最後に頂き、参加者のお一人だった津守房江先生からもコメントを頂いて、充実感のうちに会を閉じました。

*当フォーラムにつきましては、ECCCELでブックレット化を予定しております。詳しくはそちらをお読みください。

「笑う」「笑い」「ユーモア」

— 第四十巻第四号（一九四〇年四月）、
第四十六巻第九号（一九四七年十一月）より —

子どもが、気の良さや楽しさ、人間らしさを発揮するには、笑い合えるつながり、ユーモアのある雰囲気が必要でないように思う。硬くまじめくさった、今にも注意されたり怒られたりするかもしれないような、油断ならぬ環境においてよりも、間違いや失敗も許されるような温かく楽しい環境の中でこそ、人は他者や自己への不信感を募らすことなく、人も自分もまんざらではないと思ひ、人間らしくいられるのではないかと。

そんな思いから、「笑う・笑い」あるいは「ユーモア」について触れられた記事を二つ紹介してみた。一つ目は、今から七十三年も前に書かれた会話風の記事で、時と所は「四月の半頃より末頃まで」「日本国中とどこどころ」とある。全四話あるうちの四話目（第四景）。A母、B保母の、漫才のような会話で、著者は、当世母親氣質を困ったものだと嘆息し、あきれてもいるのだから、同時に、このような事態を面白おかしく感じている。感じるからこそ、その面白みを伝えずにはおれないのではないかと。そしてもう一篇は、倉橋惣三による「幼児教育者とユーモア」という一九四七年の一文である。

（本誌編集委員 菊地知子）

四月といふ月は泣いたり笑ったり怒ったり（一九四〇（昭和十五）年 第四十卷第四号）

留岡よし子（十文字高女附属幼稚園）

A 1 先生、お弁当は何時からでございますか

B 〇日からでございます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが

A 2 先生お弁当は何に入れてまいったらよろしうございませうか

B 本年はバスケットでもランドセルでも袋でも何でもよろしいのでございます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが

A 3 先生お湯呑はどんなのがよろしいのでございませうか

B なるべく落しても割れません様に、アルマイトのでもアルミニウムのも……そしてお名前をつけて頂きたいのでございます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが

A 4 先生お盆はどんなのがよろしうございませうか

B 重ねますから丸いのを所持たせ願いたいと存じます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが……

A 5 先生、お弁当箱はどんなのがよろしうございませう

B 何でもよろしいのでございますが冬になりますと暖めますので新しくお求めになるのでしたらアルミかアルマイトの様な塗物でないのがよろしいのでございます。あの昨日差上げました刷物に詳しく書いてございますが

A 6 先生歯ブラシは何がよろしいのでございませう

と共に幼児のともだちであるという点からは、幼児の世界の一つの主な特質であるユーモラスな点にも、一味相通ずるところがほしい。その全く欠けている先生は、幼児にとって、有り難い先生であつても、うれしい先生でなく、たよりになる先生ではあつても、打ちとけられる先生ではないかもしれない。(中略)

しかし、そんな、わざとすることではなく、その人の気分の軽やかさから、ふと出るユーモラスな口調なり動作なりが、子どもを喜ばせ、少くも、子どもの心をらくにさせることは、幼児の友だちになれる一つの資格である。万事がきちりきちょうめんで、常住かみしもをつけたような態度だけでは、根がユーモラスな幼児が近づき難いこともないでなからう。

その日の健康加減などで、重くろしい気分、何か特別の事情でもあつて、むすばれた気分、それは、誰にでもあり勝ちなことである。おとな同志では、無理もないと思ひ、同情もされるのであるが、幼児の傍にいるものとしては、それも好ましくない。(中略)

幼児の心をひきよせなくつたつて、親切をつくし、人格的感化を与えさせなければいいと、ひきしまった口で、その人はいつでもあろう。なすませたりなんかしては、人の師たる威厳をそこなうと、あお白い顔で、その人は思うでもある。が、それでは、子どもを愛し、教えることは出来るとしても、子どもと一つにはなれない。一つに溶けあわなくては、真の教育も出来ないであらうし、愛するといつても、一方的に終らないと限らない。

子どもと一つになれるためには、先生の方には、子どもとの心と相通ずるところがなくてはならない。たいらにいえば、どこかに、子どもらしいところがなくてはならない。勿論、どこかにある。すっかり子どもと同じというのではない。先生は先生であるが、一脈、子どもに似た

点をもち、子どもらしい面もあらねばならないのである。子どもらしいというのがお氣にいらぬならば、子どもに似るといってもいい。それがいよいよ失礼に聞えるなら、童心といっている。童心というと、大層神聖なものに解されることもある。(中略)しかし、そういう高い考え方は暫く別として、子どもの心にあるがままに感ぜられるものは、その気軽さである。(中略)少くも、なんでもが動きかけて呉れるのを待ち、笑いかけて呉れるのを待っている。余りに均勢のとれ過ぎた静、しかつめらしい整は、究屈である。氣づまりでさえある。静の中にも一味の動、整の中にもふとしたくずれの気軽さ。―その気軽さこそ童心であり、ユーモリスト幼児の心である。従って、その気軽さ、そのユーモアを全く欠いては、幼児の心と一つになれない。(中略)おとなは、そのかたくななのを厳肅と呼び、そのぎこちなさを厳格と称えて、教育の規としたりするが、教育そのものは嚴なるものであるとしても、その教育で心が一ぱいになりきって、すきも余裕も残り保たれないのは、われらの心の狭さからであり小ささからである。ユーモアの名において、ふざけよ、おどけよ、じょうだんをいえというのではない。ただ、心にいつもゆとりを有していたいと思うのである。このゆとりの中に、子どもらの無邪氣ないたずらも許されるであらうし、軽いからかいで子どもを喜ばすことも出来るであらうし、子どもといっしょに、うっとりしていることも出来るであらうし、子どもと共に心から興ずることも出来るであらう。こんなことは、教育として格別たいしたことでもないかも知れない。しかし、子どもには、それが、どんなにうれしいことであらう。先生は、えらい人であると共に、ありがたい人であると共に、どこか自分達に似たところのある人だと思ふであらう。わたしの先生だとも感じるであらう。(後略)



シンポジウム「共に育ち、共に学ぶ」

障害のある子どもない子ども共に保育する園がある。普通学校で生き生き学ぶ障害児がいる。多様性の豊かさは、保育も教育も社会も豊かにする。
日時：2013年10月20日(日)13:00～16:00
会場：金沢市立玉川こども図書館交流ホール
入場無料（ただし資料代200円）

シンポジスト：

神原洋一（医学博士 お茶の水女子大学大学院教授）
徳田 茂（障害児を普通学級へ全国連絡会代表）
高 和世（金沢つながりの会代表）
大庭正宏（太陽の子保育園園長 / 東京都羽村市）
北方美穂（あそびをせんとや生まれけむ研究会代表）
主催：あそびをせんとや生まれけむ研究会（こども環境学会登録認証団体）、金沢つながりの会
お問い合わせ：北方美穂 miho.kitagata@gmail.com

本の紹介

『居場所のちから 生きてるだけですぐいんだ』
西野博之 教育史料出版会 2006年

本号「食べる・つながる・育つ」への西野氏登場を機に徐々に本書を読み返した。
「僕らが求めているのはその人を排除するための専門性ではない。どうやったらその人を受け入れ、一緒に生きていけるかを考え合うこと。今まで、その人とつながりあっていこうとする人の「思い」より強い力をもつ『学説』に出会ったことがない。……」
改めて良い本だと思った。(K)

第18回 学校図書館のつどい

日時：2013年12月15日(日)13:00～16:30
会場：専修大学神田校舎 3030 教室（570人収容）
プログラム：

13:00～14:50 講演「電子書籍出版の現状と、図書館での活用の可能性について」(仮題)
植村八潮氏（専修大学教授。出版デジタル機構会長。元東京電気大学出版局局長）
15:00～15:50 報告「電子機器を使った図書館活動」横山寿美代氏（公立小学校学校司書）
15:50～16:30 交流会

参加費：700円（学生500円）

主催：親子読書地域文庫全国連絡会

<http://oyatiren.net/profile.html>

日本子どもの本研究会(実行委員長 近藤君子)

http://homepage3.nifty.com/kodomo_nohonken/

本の紹介

『なつかしい時間』長田弘 岩波新書 2013年

現代を代表する詩人による本書は、主にNHKの「視点・論点」で17年の長きにわたって放送された原稿を時系列にまとめたもの。「奇しくも本書は、二十世紀の終わりから二十一世紀へ、そして、3.11へという時代の潮目に立ち会いつつ書になりました。（『あとがき 2013 大寒』より）」
「大人と違って、子どもは、あたかも一日を人生そのものであるかのように生きます。今求められているのは、そのように一日を見やり、見つめることではないのだろうか、そう思っています。最もあたりまえの時間が最も新鮮な時間でなければならないのだということを考えます。（『一日を見つめる 2011.11.1』より）」
2001年3月14日の日付のある以下の一文。日付を10年先に一瞬見間違えた。「ただただ『手に入れる』だけの文化から、『使い方』の哲学をもつ文化への、価値観の転換。今という時代は、何より『使い方』の哲学を、切実に必要としています。」(K)

エピローグ

絵描きの父をして「もう教えることは何もない」と言わしめたという天才少年ピカソ。そのピカソ 90 歳の言葉「やっと子どものように絵が描けるようになった」の「子ども」が意味するところを考えます。

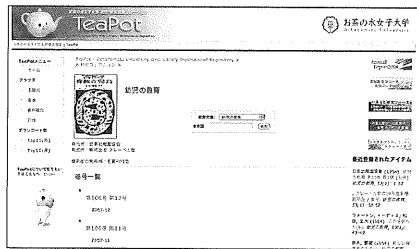
子どものみずみずしい感性・表現に触れると、自分がいつの間にか大人のものの見方、感じ方、表現方をしてきていることに気付かされますが、ピカソの非凡さは、90 歳を過ぎてもう一度「子ども」になれたことにあるのかもしれない。

これまで 11 回の問い直しを重ねてきた特集「保育の中のあたりまえのこと」。次号、第 12 回のテーマは「幼児期は準備期?」です。原点であり、時に到達点でもある「子ども」時代とは何であるか。特集の集大成として、ここにもう一度立ち返って考えてみたいと思います。(T)

幼児の教育 バックナンバーを WEB ページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成21年発行の第108巻までご覧になれます。

なお、自由投稿、「ひろば」への情報などもお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告 幼児の教育 冬号 2013年12月刊行予定

新企画も好評! 充実した内容でお届けします。

特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと12
- 幼児期は準備期? - 矢野智司先生インタビューほか

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて - 東二番丁幼稚園 (宮城県仙台市) -

連載 保育エッセイ 本田和子先生 (最終回)

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 秋号 第112巻 第4号

平成25年10月1日発行

編集発行人/浜口順子

編集担当/田中恭子

発行所/日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館

電話/03-5395-6604(編集)

振替/00190-2-19640

印刷所/図書印刷株式会社

定価/750円(本体715円)

©日本幼稚園協会 2013 Printed in Japan

編集委員/上坂元絵里

高橋陽子

菊地知子

宮里暁美

編集協力/フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業) ●

くらしの素顔

保育の場の子どもたち

秋田喜代美

くらしの
素顔
保育の場の子どもたち



保育実践の現場から著者が感じ考えた園のくらしについての13の思索と、園生活を描いた12冊の絵本の解説より、目の前の子どもの素顔から、園のくらしのあり方、保育の本質を問い直すことができます。

- 著者／秋田喜代美
- 価格／1,365円（税込）
- サイズ／21×15cm
- ページ数／152ページ

「幼児の教育」
園のくらしを育む
連載第1回～13回までを収録！

10931

ポイント1

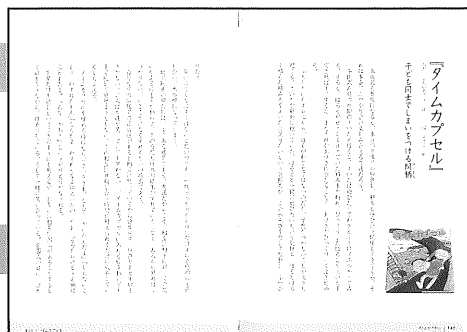
秋田喜代美先生による新鮮な保育の視点

著者が園の生活に立会い、保育の本質を探った第一部には、日々の保育のヒントとなるエッセンスが満載です。

ポイント2

園の生活を描いた絵本の読み解きが面白い！

書き下ろしの第二部では、定番～新作まで12冊の絵本を研究者の視点で読み解きます。普段読み聞かせている絵本の奥深さに触れて、保育の幅がぐ～んと広がります！

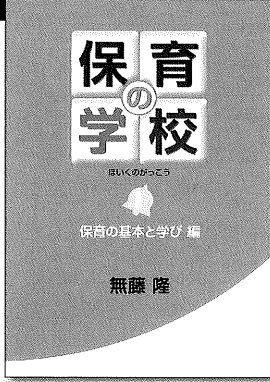


保育の学校

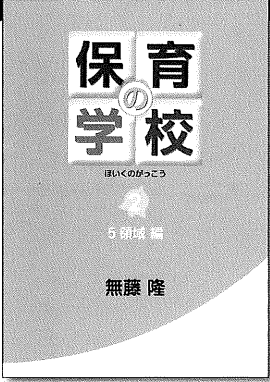
平易な言葉でわかりやすく。
保育をふりかえり、考え、
深めていくための16講義。

無藤 隆 / 著

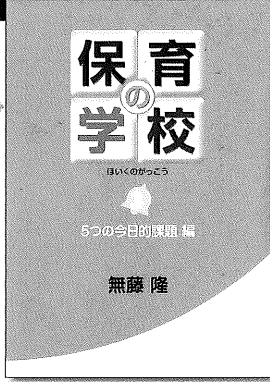
21×15cm 136ページ 定価各1,365円(税込)



保育の基本と学び 編
10931
養護と教育の一体的保育、教育課程・保育課程と指導計画や、数・図形、文字などについての講義。



5領域 編
10932
「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」の5領域と、体験の多様性と関連性についての講義。



5つの今日的課題 編
10933
子育て支援、評価、小学校との連携、特別支援、食育、保育の5つの今日的課題についての講義。

予習

● 1. 健康と環境
健康と環境は、保育の基礎となる。健康な子どもは、環境の中で安心して生活できる。保育者は、子どもの健康と環境を大切に育てる責任がある。

講義

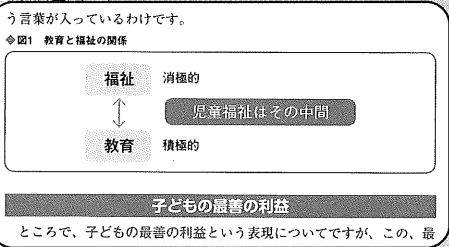
● 1. 健康と環境
健康と環境は、保育の基礎となる。健康な子どもは、環境の中で安心して生活できる。保育者は、子どもの健康と環境を大切に育てる責任がある。

Point

保育を考えるために、16のテーマを設定。すべての講義が

予習→講義→まとめ→小検定

で構成されているので、園内研修にも最適です!



まとめ

● 1. 健康と環境
健康と環境は、保育の基礎となる。健康な子どもは、環境の中で安心して生活できる。保育者は、子どもの健康と環境を大切に育てる責任がある。

小検定

● 1. 健康と環境
健康と環境は、保育の基礎となる。健康な子どもは、環境の中で安心して生活できる。保育者は、子どもの健康と環境を大切に育てる責任がある。

- 2) 「子どもの最善の利益」を英語でどう表記するでしょう。選びなさい。
1. good interest 2. better interest 3. best interest
- 3) a, bに入る言葉を選択肢から選びなさい。

保育所は、(a) でなければならない、という表現をしています。教育学を勉強したら、この、(b) という言葉がややこしい言葉であるということを学ばざるをえないのですけれど、例えば、教育委員会においては、幼稚園は教育の場なのですね。教育委員会に、(b) という言葉はあるにはあるのですが、(a) という表現はないと思

▲図解でわかりやすく!

◀ポイントを再確認!

電子版もあります!

定価 七五〇円(本体七二五円)☆